

Title	異分野コラボレーションによる地域活性化の試み ―「遍プロジェクト」のケース・スタディー―
Author(s)	達, 儒
Citation	
Issue Date	2009-03
Type	Thesis or Dissertation
Text version	author
URL	http://hdl.handle.net/10119/8076
Rights	
Description	Supervisor: 吉田 武稔, 知識科学研究科, 修士

修 士 論 文

異分野コラボレーションによる地域活性化の試み
—「遍プロジェクト」のケース・スタディー—

北陸先端科学技術大学院大学
知識科学研究科知識社会システム学専攻

Da,Ru

2009 年 3 月

目次

第1章	序論.....	1
1-1.	研究の背景.....	1
1-1-1.	「分野細分化」は様々な問題を生みだす.....	1
1-1-2.	停滞している地域コミュニティと十分活用していない地域資源.....	2
1-1-3.	社会ニーズを満たす活動から社会ニーズの創出への期待.....	3
1-1-4.	異分野コラボレーションの試み.....	4
1-2.	研究の目的と意義.....	5
1-3.	リサーチ・クエスチョン.....	5
1-4.	「遍プロジェクト」をケースに選んだ理由.....	5
1-5.	研究の方法.....	5
1-6.	論文の構成.....	6
第2章	文献レビュー.....	7
2-1.	はじめに.....	7
2-2.	地域活性化の現状.....	7
2-2-1.	地域活性化の意味.....	7
2-2-2.	コミュニティ・ビジネス.....	8
2-2-3.	地域ブランド.....	11
2-3.	歴史的資源の活用現状.....	11
2-3-1.	活性化資源としての歴史的遺産.....	11
2-3-2.	歴史的資源の活用現状.....	15
2-4.	異分野コラボレーション.....	17
2-5.	異分野連携と地域活性化.....	19
2-5-1.	異分野連携.....	20
2-5-2.	産学官(公)連携活動.....	22
2-6.	知識創造プロセスと場、リーダーシップ.....	23
第3章	「遍プロジェクト」の事例分析.....	26
3-1.	はじめに.....	26
3-2.	「梅田日記」の概要.....	26
3-3.	「遍プロジェクト」.....	29
3-3-1.	「遍プロジェクト」の概要.....	29
3-3-2.	「遍プロジェクト」の活動.....	30
3-3-3.	「梅田日記ぶろぐ」の発信.....	32
3-3-4.	第1回遍フォーラム開催.....	36

3-3-5. 「梅田日記に見る幕末金沢の街・人・時間を訪ねる旅」の実施.....	39
3-3-6. あまね WiKi 運用開始.....	41
3-3-7. 「梅田日記」の再現料理試食会―「遍夜」の開催.....	42
3-3-8. 第2回遍フォーラム開催.....	43
3-3-9. 「幕末金沢の庶民の暮らし - 梅田甚三久日記が描く旅 - 」の実施.....	44
3-3-10. 「幕末金沢町人の暮らし―翻刻 梅田日記―」の出版.....	51
第4章 結論.....	53
4-1. はじめに.....	53
4-2. 事例分析と主要な発見.....	53
4-3. 今後の課題.....	61
参考文献.....	62
本論文に関係する学会発表.....	63
インタビュー記録.....	64
*現地調査時に参加.....	64
附属資料①第1回遍フォーラムアンケート集計結果（金沢星稜大学 沢田史子氏）.....	65
附属資料②モニターツアーのアンケート集計結果と事業評価.....	67
附属資料③第2回 SCOPE 委員会議事録.....	73
謝辞.....	75

目次

図 2-1	コミュニティ・ビジネスの事業化フロー	9
図 2-2	期待されるコミュニティ・ビジネスの効果	10
図 2-3	コミュニティ・ビジネスの移動手順	10
図 2-4	文化財の体系図	14
図 2-5	異分野視点の出会いと効果	17
図 2-6	異分野コラボレーションによる仕様の決定	18
図 2-7	異分野の人々の交流の場と創造の場づくり	19
図 2-8	新連携と新事業活動	21
図 2-9	国における異分野連携施策等の位置づけ	21
図 2-10	SECI モデル	24
図 3-1	「梅田日記」の表紙と梅田甚三久	26
図 3-2	梅田日記原文画像（一部）（慶応元年 5 月 11 日）	29
図 3-3	梅田日記原文画像（一部）（元治元年 6 月 15 日）	29
図 3-4	「遍」のロゴ	30
図 3-5	梅田日記ぶろぐ	32
図 3-6	歴史資料の解読プロセス	34
図 3-7	第 1 回フォーラムの様子	36
図 3-8	第 1 回遍フォーラムアンケートシート	37
図 3-9	第 1 回フォーラムの男女別年齢区分	38
図 3-10	遍フォーラム開催の情報源と「梅田日記」の認知度	38
図 3-11	第 1 回遍ツアーの様子	39
図 3-12	観光ルート図	40
図 3-13	携帯サイドで見られるツアー情報	40
図 3-14	あまね WiKi	41
図 3-15	「遍夜」の様子	43
図 3-16	第 2 回フォーラムの様子	43
図 3-17	歴史学研究者による「幕末金沢の庶民の暮らし」講座	45
図 3-18	再現料理と飲食体験の様子	45
図 3-19	ボランティアガイドツアーの様子	45
図 3-20	お座敷体験	46
図 3-21	謡体験	46
図 3-22	酒試飲と酒蔵見学	46
図 3-23	募集ちらし	47
図 3-24	再現料理解説リーフレット	48

図 3-25	ガイドマップ	48
図 3-26	石川県観光協会の HP の案内	49
図 3-27	新聞記事のコピー	49
図 3-28	モニターツアーの様子	51
図 4-1	遍のメンバー構成変化	54
図 4-2	遍における交流と創造の場づくり	55
図 4-3	様々な情報メディア	55
図 4-4	異分野コラボレーションの視点で見る遍の活動プロセス	57
図 4-5	異分野コラボレーションの手法による歴史資料の活用モデル	57
図 4-6	「遍」が今まで果せた地域活性化効果	59
図 4-7	地域活性化のための歴史資料活用フローモデル	60

表目次

表 2-1 歴史的資産の種類.....	13
表 3-1 「梅田日記ぶろぐ」のアクセスログ解析結果（2007 年 7 月～2007 年 11 月）	35
表 3-2 「梅田日記ぶろぐ」のアクセスログ解析結果（2008 年 4 月～2008 年 12 月）	35
表 3-3 モニターツアー実施者概要	44

第1章 序論

1-1.研究の背景

1-1-1.「分野細分化」は様々な問題を生みだす

分野細分化が生じる様々な問題について、久保田・藤井（1995）は以下のよう
にまとめている：

第二次世界戦争後、経済成長と「モノの豊かさ」に連れて、国民の夢に応じ
るため、世界先進各国は多くの企業で大量生産のシステムを構築してきた。そ
れに連れ、生産システム面だけではなく、人材教育、人事制度、勤務体系、情
報伝達ルート、意志決定システム、ピラミッド組織など、企業全てのシステム
が大量生産に適した形態で作られてきた。

大量生産システムは「いかに効率よく分業を進めるか」という課題に対面し
なければならない。この課題に向けて、分業化が進められ、必然的各分野での
知識が急激に増大し、それによって分業が加速されているといえる。従って、
モノが豊かになる現代社会は分業化が産んだ社会構造の「領域の細分化」とい
う問題に対面している。

社会構造の「領域の細分化」問題は、社会の様々な面で影響を与えているが、
その中でも大学教育における影響は最も顕著的と言える。大量生産体制のニー
ズに応えるような人材教育を重視する大学は、教育システムの効率化、専門化
が進んできた。例えば、今の東京大学工学部には17の学科が設けられているが、
工学部の前身である東京大学工学部設立当初の1886年（明治19年）には学
科はわずか7つしかなかった。学科を増やしていく背景に関して、技術の発達
に伴う教えるべき知識の増大が挙げられる。最新の知識を限られた年度で効率
よく体系的に教育するには、学科を増やすことがどうしても必要だったである。

現代は、各分野内の知識や情報が増大し、人々は日々自分の分野のルーティ
ング・ワークに追われ、中々新しい分野まで手が回らないのが実情である。そ
の結果、同じことが複数の分野で手掛けられ、それぞれの分野の専門用語や文
化の違いが顕著になるなど、分野のギャップは広まるばかりである。分野の専
門性による倫理観、行動規範、総合的な視点での問題解決の難しさなど、様々
な障害を生みだす。こういった問題は、大量生産パラダイムに連動して教育の
効率化が求められてきた中で、総合的な視点の育成が抜け落ちてしまいがちで
ある大学教育の状況とも関連している（久保田、藤井1999 p.101～117）。

そういった状況に対し、近年異なる視点の交流を求める横断プロジェクトや
産学共同など組織間の連携の必要性が叫ばされてきた。

1-1-2. 停滞している地域コミュニティと十分活用していない

地域資源

相原（2002）は「地域活動」についてこのように述べている：「地域活動は、その地域で生活を営む住民と、企業、各種法人などの地域の組織行動を営む事業体、そして地方自治行政の 3 本柱で成立し、それらの共同作業により地域は運営されているといえる。活動の主体は本来住民一人ひとりの責任の下にあり、彼らの意思を尊重しつつ地域は運営されるべきものである。しかし、日本の多くの地域においては住民の意見を反映しないまま、行政の規定路線の延長線上で時代の変化を無視して予算消化ともいえる独善的な地域運営を行ってきた」（相原 2002 p. 1）。

この住民不在の地域活動実態は、都市の商工業地、農産漁村を問わず、多くの地域コミュニティが就業率機会の減少や経済活動の停滞などの結果を招いたといえる。

また、地域は過疎化、少子化、高齢化といったさまざまな社会問題を抱え、住民が安心して暮らせる地域コミュニティの基盤が失われつつある。従って、日本は国民総生産を中心としたマクロ経済の指標では経済大国であって、物質的には豊かな社会と言えるが、国民一人ひとりには経済大国としての充実感がないと言える。地域コミュニティの再生について、日本における従来の行政主導、都会計画の延長線上での施策は、地域コミュニティを一方的かつ単一的にしか捉えてきてないと言える（細内 1999、相原 2002 を参考）。

地域コミュニティのこの実態に対して、細内（1999 p. 16）は、「地域コミュニティの多様な人、モノ、カネ、情報を巻き込んで展開し、地域社会の信頼を得ること、また、雇用機会の創出や、地域の資源・技術を活用することは、地域内で人、カネ、情報を循環させ、地域内に自立的な経済基盤、すなわち地域コミュニティの元気の基盤を築くことに繋がります」と述べている。

地域活性化には、地域住民の積極的な参加、協力が必要である。また、地域に既存している潜在資源の有効利用による新しい風を取り入れることも重要である。しかし、現状は社会復帰を期待している定年退職者、失業者、研究成果を社会に生かしたい研究者など有能な人材資源が十分活用されていない。また、地域の名所、街並み、歴史資料、及び図書館に長年眠ったまま、世間に知られていない学術性の高い、地域振興事業に応用価値のある歴史資料などの地域資源も十分活用されていない。このような地域に既存する応用価値のある資源を発掘し出し、有効かつ能動的に活用することは、地域に更なる付加価値の創出

を期待させる一方、住民が安心して暮らせる地域コミュニティの創造にも繋がる。

1-1-3. 社会ニーズを満たす活動から社会ニーズの創出への期待

1992 年、東京都墨田区の異業種交流グループが、消臭繊維の用途を検討していたときに、メンバーの一人が「母親が寝たきりになって、部屋の匂いが気になるようになった。試しに消臭繊維でシーツや枕を作ってくれないか」と切り出したことがきっかけで、メンバーたちは、消臭繊維が地域の高齢者の生活改善に繋がると気付く、消臭繊維による介護用品の商品化に踏み出し、エイツプロジェクトという福祉関連専門の会社を設立した。エイツプロジェクトの店舗は、消臭繊維を活用した商品だけではなく、高齢者向けにベッドや車椅子なども取り扱っていた。また、エイツプロジェクトは介護の相談や住宅改造の相談にも応じており、介護問題に関する情報交換の場ともなっていた。東京墨田区は、地域内の異業種グループによる活動の中から、このような地域社会のニーズに対応する活動・ビジネスを生み出した（細内 1999 p. 36～37）。

この事例には、異業種交流グループが地域高齢者の消臭繊維に対するニーズに気付く、消臭繊維による介護用品を商品化し、消費者のニーズを満たした。更に、介護の相談や住宅改造の相談など、新しいサービスを創出することによって、消費者のニーズを引き起こしたといえる。現代社会は、単なる社会ニーズを満たすためのサービス提供は不十分であり、社会ニーズを創出し、それに反映するサービスの提供が必要となってきた。

21 世紀に入り、地域の「差別化」と「消費者との関係性の構築」を目的とした地域ブランドの創出関連事業を通して、社会ニーズの創出への期待が高まった。地域ブランドは、消費者に対して、地域の差別化を行うことで持続的な地域の活性化を達成する役割を持つ。また、揚げる目的によって異なる作り方や使い方が可能という特徴を持つ。例えば、地域名と地域産の商品、食品等の結びつけ「ものの地域ブランド化」を計る自治体（宇都宮市「餃子」、夕張市「メロン」、大分県佐賀関漁港「関サバ」等）や、地域全体の価値を高める戦略を取っている自治体（仙台市「シテイセルス」、香川県、福井県等）などがあげられる（崔瑛 2007 p. 2～3）。

本論文の研究対象である「遍プロジェクト」の活動も地域ブランド創出活動の一つとして、石川・金沢地域の歴史資料「梅田日記」のブランド化を図り、地域活性化に向けて力を注いでいる。「遍プロジェクト」の活動は「ものの地域ブランド化」に当てはまると考える。

1-1-4. 異分野コラボレーションの試み

前述したように、分野のギャップを妥協せず乗り越えるには、既存領域の価値の再構成による新しい価値観の創造が必要。さらに、新しい価値観の創造のためのノウハウ蓄積も必要である。

また、日本は明治以降、富国強兵政策の中で、欧米の科学技術を常に「輸入」する人材教育を重視してきたが、その科学技術を育つ文化的土壌の重要性を軽視してきた。それにより、日本はオリジナリティを育つ文化的土壌の欠如による制限は多くの専門家に指摘されてきた。つまり、欧米の科学技術を学び改良する時代から、自分自身の目で問題を発見し、独自の創造性による社会問題の解決を求める時代がやってきた（久保田、藤井 1995 p. 109～110）。

それらの問題に向けて、近年、さまざまな領域における異分野・異業種間の交流が盛んでいる。例えば、異なる業態を持つ企業が協調して結果を出すことを目的とした交流や、企業に限らず「産学官」（企業など産業分野・政府機関など官公庁・大学など教育機関）連携事業などが挙げられる。

そして異分野・異業種間の交流の場について、異業種交流は「日本では商工会議所などがあるが、欧米ではライオンズクラブやロータリークラブなどによる場を提供することが多い。他には経営者や重役・一般の社員などが卒業校の交友関係など、個人的な繋がりでの延長で交流を行う場合もある。こういった関係による人々個々の得意分野で技術や人材を供出し、或いは資材など企業が保有する資源を提供し合うといった活動も見られる。これらの活動では新製品の開発・流通からニッチ市場の開拓・社会問題への対応、新規市場の創出、または自企業・団体内の人材を交換し合って経験を積ませ更に成長を促そうとするなど、様々なレベル・方向性のものが見られる」。¹

本論文で紹介する異分野コラボレーションのアプローチもそのような様々な活動の一つと言える。久保田晃弘と藤井浩美の著書「異分野コラボレーション—視点の交錯から創造へ」では、初めて異分野コラボレーションを一つのアプローチとして紹介し、「経験と価値観の異なる人々との協同作業を通して、今までとは違うモノの見方を学ぶと共に、問題意識を共有するメンバー間で発想のシナジー効果を生むことにより、創造性を引き出すためのアプローチである」と、異分野コラボレーションの概念を定義した。彼らは異分野コラボレーションのアプローチを取り入れ、A.T.E プロジェクトの活動をスタートした。A.T.E

¹ Wikipedia 異業種交流

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%95%B0%E6%A5%AD%E7%A8%AE%E4%BA%A4%E6%B5%81> 参照

プロジェクトは、Art（芸術）、Technology（技術）、Environment（環境）という3つのキーワードを手がかりとして、人間と技術、社会と技術の新しい関係を実践的構築していこうとする活動である。活動の詳しい内容は後章で紹介する。

本論文の研究対象「遍プロジェクト」も、異分野コラボレーションの一つの典型例として捉えられる。

1-2. 研究の目的と意義

本研究は「遍プロジェクト」の活動を観察し、データを収集、分析を行うことにより、「異分野コラボレーションは地域活性化に対していかに有効であるか」というリサーチ・クエスチョンを明らかにする。「遍プロジェクト」を異分野コラボレーションの典型例として扱い、活動を明らかにすることによって、他地域における類似問題の解決策提供に有意義である。

1-3. リサーチ・クエスチョン

歴史資料を地域活性化に活用するに関して、日本においても先進的なケースであり、近年各地で出始めている。本研究は、その一つ江戸幕末期、石川・金沢地域の町人梅田甚三久が書いた日記の活用に関するケース・スタディである。

本研究のメジャー・リサーチ・クエスチョンは、「異分野コラボレーションは地域活性化に対していかに有効であるか」であり、サブシディアリー・リサーチ・クエスチョンは、以下の通りである：

- (1) 「遍プロジェクト」の異分野専門家達は、どのように共同作業を行ったのか
- (2) 異分野コラボレーションはどのように新しい価値観を生み出したのか
- (3) 異分野コラボレーションは地域活性化においてどのような役割を果たしたのか

1-4. 「遍プロジェクト」をケースに選んだ理由

「遍プロジェクト」はそれぞれ違う分野の専門家が集り、分野のギャップを乗り越えて、新しい価値観の創造に挑んでいる。異分野コラボレーションの典型例だと言える

1-5. 研究の方法

本研究は、上記のリサーチ・クエスチョンに答えることを目的としている。この目的を果すために、リサーチ・ストラテジーとしてケース・スタディを採用する。ケース・スタディは、複雑なデータ源（例えば文書、インタビュー、

現地調査など）を通じて事象を検証することにより、複雑な現実や事象のプロセスの解明に非常に有効である（ロバート、イン 1996）。

データ収集と分析は、初めに関連する書籍や論文・新聞記事などから始めた。さらに、公に発表されていない各種研究報告書などのドキュメント・アナリシスも行った。しかし、それだけでは完全でないので、データ収集もう一つの方法として、事例のキーパーソンである堀井 洋氏（本学知識科学研究科助教、「遍プロジェクト」リーダー）、横井 美里氏（元金沢大学資料館学芸員、金沢大学大学院社会環境科学研究科博士後期）、沢田 史子氏（本学知識科学研究科研究員）、林 正治氏（本学知識科学研究科 博士後期）、武野一雄氏（金沢市観光ボランティアガイド）ら計5人に直接インタビューを実施した。また、筆者は遍プロジェクトのメンバーとして、積極的に遍プロジェクトの活動に参加し、自らの実体験を通して、遍プロジェクトに対する理解を深めた。

以上のような資料分析、インタビュー、実体験を通じて、事実の確認やそれらの相互関係、生起の順序、事象の本質の理解を行った。

1-6. 論文の構成

本論文は、以下のように構成されている。次の第2章では、地域活性化、歴史的資源の活用現状、異分野コラボレーションについての先行研究の文献レビューを行う。第3章では、「遍プロジェクト」の事例を時系列的に記述する。更に、それらの事例が石川・金沢地域の地域活性化事業との関連を明らかにする。第4章は結論として、事例分析からの主要な発見をまとめると同時に、理論的含意としてモデルを構築し、そして今後の課題を提示する。

第2章 文献レビュー

2-1. はじめに

この章では、本研究のテーマに従って、先行研究のレビューを行う。初めに地域活性化の現状について述べた後、歴史資源の活用現状、異分野コラボレーション、異分野連携と地域活性化、そして知識創造プロセスと場・リーダーシップに関する文献レビューを行う。

2-2. 地域活性化の現状

2-2-1. 地域活性化の意味

研究背景の部分には、日本の住民不在の地域行政、停滞している地域コミュニティ、およびそれらにより住民が安定した生活基盤を失うつつであることを述べた。これらの問題を解決することに直面し、近年「地域活性化」は各地域・自治体の重要な課題の一つとなった。

「地域活性化」という言葉について、鳥居（2000 p. 2）は「最近の出版物から同意語的なものを列挙すると以下ようになる。『地域振興』、『地域開発』、『都市復興』、『都市計画』や『町づくり』、『故郷づくり』、『産業おこし』、『コミュニティ再生（再建）』、『まちなか再生』。最近ではTMO(Town Management Organization)も一般化してきた。これは字句の違いこそあれ殆どが同じ志向を持った言葉である。さらに、これらの言葉に『商店街』、『地方都市』、『ビジネス』、『マネジメント』、『市民参加』、『住民組織』、『自治体』、『観光による』などの言葉が加わってくる」と述べている。

河村（1991 p. 3）は「地域活性化」を、「日常行為によって達成される水準を超える付加価値を達成する動き」と定義している。付加価値の内容として、経済的付加価値（所得の向上）と社会的付加価値（生活充足度の向上）の二つを挙げている。

鳥居（2000）は都市計画についてこのように述べている：『都市計画』は『地域活性化』と同様の意味を持つとして、役所的な響きの言葉という印象があるが、現在も頻繁に使われている。都市計画制度の基本法は『都市計画法』である。都市計画法の目的は、第1条に『都市の健全な発達と秩序ある整備を図りもって国土の均衡ある発展と公共の福祉に寄与する』と記されており、基本理念として『農林漁業との健全な調和を図りつつ、健康で文化的な都市生活及び機能的な都市活動を確保すべきこと並びに適正な制限のもとに土地の合理的な利用が図られるべきこと』と定められている。都市計画法は平成10年に改定さ

れ、自治体がより自由な判断で特別な目的のために土地の用途制限を行う制度を使うことができるようになった。その他、『大店立地法』の制定により、自治体は大型店の立地に関して、その周辺地域の生活環境の保持のための適正な配慮をするようになった。関係省庁、地方公共団体、民間事業者等が連携して推進し、地域の振興と秩序ある整備を図ることを目的として、『中心市街地活性化法』、『市街地の整備改善』と『商業等の活性化』が平成 10 年に制定された。この三つの法律を通称『まちづくり三法』と呼び、それぞれを連携させて市町村の中心市街地を計画的に活性化することを目指している(鳥居 2000, p. 3~4)。

2-2-2. コミュニティ・ビジネス

地域の活力を生み出す事業として、「コミュニティ・ビジネス」が唱えられてきた。コミュニティ・ビジネスの概念について、細内(1999)は「地域住民が良い意味で企業的経営感覚をもち、生活者意識と市民意識のもとに活動する『住民主体の地域事業』、地域コミュニティに住む人々が『自分の仕事起こし』をし、本当の意味での自立を図ろうとすること」だと述べている。地域コミュニティの再生活動のビジネス化の必要性について、細内は以下の3点にまとめた：

- ① 景気が悪くなり失業者が増えてくると、住民自身による地域コミュニティの再生活動を「活動」のレベルから雇用を生むために一歩踏み出す必要が出てくる。
- ② 再生活動をビジネスにすることによってスピードがつぎ、継続性が生まれ、地域コミュニティの多様な人・物・金・情報を巻き込んで展開し、地域社会の信頼を得ることができる。
- ③ 雇用機会の創出や、地域の資源・技術を活用することは、地域内で人・物・金・情報を循環させ、地域内に自立的な経済基盤、すなわち「地域コミュニティ」の基盤を築くことに繋がる。働き手にとって働きがいや生きがいを得られ、地域に新しい社会関係と生活文化を蓄積していくことが期待できる。

図 2-1 コミュニティ・ビジネスの事業化フロー

出典：細内（1999）p.18 図表 1 を引用

細内はコミュニティ・ビジネスの事業化フローを図 2-1 にまとめている。この事業化フロー図から、住民自身が主体的に地域コミュニティの課題に取り組み、自ら問題解決をしていくことによって成功するプロセスが見える。行政や企業はこのプロセスの中に、住民の活動を側面から支援することが期待されている。それに、「地域の元気づくり」として、地域の問題を捉えるなら、産業振興・福祉対策など個別の「活性化」や「問題解決」ではなく、「地域コミュニティ総体」として問題・課題を認識し、地域コミュニティ本来のニーズに対応する活動を行う必要があるとわかる。

また、細内はコミュニティ・ビジネスの期待される効果図（図 2-2 を参照）を提示している。コミュニティ・ビジネスは、単に経済効果だけを地域コミュニティにもたらすではなく、地域全体の元気づくりに対する効果も期待される。コミュニティ・ビジネスの移行形態の多様性について、相原（2002）は図 2-3 にまとめ、「大きく分けて、活動の黎明期から、直接営利法人化・NPO 経由で営利法人化・NPO のまま・法人団体・任意団体で移行しつつ活動成熟期を迎えることになり、活動の内容により最適な選択をすべきものである」と述べている。

図 2-2 期待されるコミュニティ・ビジネスの効果

出典：細内（1999） p. 56 図表 4 を引用

図 2-3 コミュニティ・ビジネスの移動手順

出典：相原（2002） p. 7 図 7 を引用

2-2-3. 地域ブランド

地方自治体による地域ブランド開発の背景について、崔瑛（2007：p. 1）は「地方分権への流れの中で地域間の競争が激しくなり、自治体運営においても独自の個性をいかした成長戦略が求められている。多くの地域は内部資源を利用し、外部企業や資本、人的資源を誘致するためのマーケティング活動を強化しはじめている」と述べている。

アーカー（1994）は企業でのブランドの位置づけを「企業経営の戦略的な無形資産」としている。崔瑛（2007）は企業ブランドについて、「優良ブランドを保有する企業はそのブランドを利用し、消費者との関係性の構築、他社との差別化ができると同時に、新たな価値を創出することもできる」と論じている。

「地域ブランド」という言葉には厳密的な定義はないが、地域ブランドは地域の商品や観光資源のブランド化を主にする個別資源のブランド化であるという捉え方が多い。また、地域が持つイメージをアップしていくイメージのブランド化も地域ブランド化の一つとしてあげられるようになってきた。

2-3. 歴史的資源の活用現状

2-3-1. 活性化資源としての歴史的遺産

「歴史的遺産」の定義について、鳥居（2000 p.4）は『『歴史的遺産』には厳密な定義はない。『文化財』という視点からではなく、身近な歴史を語るもの全体を『歴史的遺産』あるいは『歴史的環境』と呼んでいる。有形、無形の区別なく、歴史を伝えるもの全てが『歴史的遺産』である。『文化遺産』、『ふるさと資源』という呼び方もある」と述べている。

文化財について、鳥居は「文化財とは、『文化財保護法』では『有形文化財』、『無形文化財』、『民俗文化財』、『記念物』及び『伝統的建造物群』と定義し、国が指定選定し、重点的な保護の対象としているものである」（p.4）と述べている。このほか、近年各地域自治体が身近な文化財建造物を登録有形文化財に登録し保護することに力を注いでいる（図 2-4 参照）。

文化庁は登録文化財を、「近年の国土開発、都市計画の進展、生活様式の変化などにより、社会的評価を受ける間もなく消滅の危機に晒されている多種多様かつ大量の近代の建造物を中心とする文化財建造物を、後世に幅広く継承していくために、届出制と指導・助言・勧告を基本とするゆるやかな保護措置を講じる制度である。これは、従来の指定制度（重要なものを厳選し許可制等の強い規制と手厚い保護を行うもの）を補完するものである」と定義し、平成 8 年

10月からスタートしている²。

文化財と比べて、「歴史的遺産」はさらに広い意味を持つ。大河（1995）は、「歴史的遺産」の概念を都市マスタープラン、地域別基本方針、景観マスタープランでの位置づけることが必要とし、「歴史的資産」の種類を表 2-1 にまとめている。

歴史的遺産は活性化の資源として認識され、いかに活用されるかについて、鳥居（2000）は「第一に考えられるのが、観光資源としてである。歴史の蓄積のない町には潤いがない。歴史的遺産には人を引き付けるものがあり、もっとも効果的人を集まる観光資源となりうる。ほとんどの地域で観光の資源としての活用が論議されている。第二に、歴史的建造物そのものを現代に活用、再利用することである。地域のランドマークになる例が多い。ファサード保存などがこれにあたる。第三に、都市がかつて持っていた栄光を歴史的遺産を通して再発見することにより住民のアイデンティティを復活させることである」（p. 6）と述べている。

しかし、歴史的遺産は表 2-1 のように都市を取り巻いている自然の風景、河川・水路・泉、道、近世以前と以降の公共的な建物・施設、町並み・民家、伝説地・生家・名所、遺跡が含まれているが、歴史資料・書籍などは含まれていない。歴史資料や書籍に記述された歴史的町並み、歴史的橋、寺社などは、歴史的遺産の活用において重要なキーワードである。特に一般人の書いた記事は、作者が生活していた時代の地域での食事、行事、事件、娯楽、風俗など、及び作者の私生活に関する記述が含まれており、今の人々が過去の人物や社会を理解する素材として、地域のブランドとして、多様な分野・目的において活用する素材としても非常に重要な資源である。

本論文の研究対象「遍プロジェクト」が題材に使っている「梅田日記」も、そのような一般人による記事である。「梅田日記」を題材に選んだ理由について、『遍プロジェクト第1回フォーラム研究成果報告書』では「今回の試みの第一に『梅田日記』という歴史資料を取り上げたのは、この日記が当時の『庶民』によって書かれたこと、内容が日常生活をよく表現していること、現存する場所や地名が頻繁に出てきたことなどが理由として挙げられよう。『梅田日記』の内容は、歴史学や民俗学等の分野では、若林氏による翻刻版の出版以来注目されてきた。例えば、『梅田日記』の中には、池田屋事件や長州征伐などの全国的な事件の風聞や、元治の変など加賀藩の政治的な動きと関連する記述がたびた

² 文化庁ホームページ 登録有形文化財（建造物）ページ
<http://www.bunka.go.jp/1hogo/main.asp%7B0fl=show&id=1000000129&clc=1000000033&cmc=1000000097&cli=1000000104&cmi=1000000118%7B9.html> 参照

び出てくるが、これは幕末維新期の政治・社会の変化を庶民がどのように受け止めたのかを知りうる貴重な資料である。また、食事や年中行事、娯楽、冠婚葬祭などについての記載も、金沢の民族研究にとって興味深い対象であろう。なお、近世後期における金沢町の日記としては、武士や儒学者が書いた日記は現存するが、『庶民』が書いた日記・記録類は、管見の限りごくわずかしかない。その中には、下尾張町の上層町人であった菱屋彦次が書いた文政9年（1826）から天保12年（1841）にわたる『年中行事』、引替所調筆御用を務めた津幡屋清兵衛の『諸事留帳』などの記録類があるが、どちらも『梅田日記』のように詳しく日々の日常生活を記したものではない」と述べている（堀井 美里 p.3）。

表 2-1 歴史的資産の種類

都市を取り巻いている自然の風景	*山・丘陵・水面 *遠くに見える名山 *斜面林
河川・水路・泉等	風景とさらに付属物（堤、歴史的橋、運河の石垣、石段、古くからの水路網、伝説等と関係ある池）
道	近世以前（いわゆる古道）、以降（街道、地藏、道標）、空間（広小路、大手通り）、施設（本陣、問屋、茶屋）
近世以前の公共的建物・施設	城郭、寺社、歴史的建物、鳥居、舞台、名園、櫓、森
近代以降の公共的建物・施設	県庁等行政の建物、学校、教会、公会堂、銀行、停車場、トンネル、倉庫、工場
町並み・民家	歴史的町並み、武家屋敷町、寺町および構成物（民家、蔵、塀、門、石垣）、農漁村集落、近現代的建物（煉瓦造り、洋風）
伝説地・生家・名所	伝説のある場所・塚・泉、事件の起こった場所、文人・政治家・芸術家などの生家・住居、桜・梅・紅葉の名所
遺跡	既地の遺跡、未知の遺跡（可能性の高い所）

出典：大河（1995）、p.35 表1・1・1 から抜粋

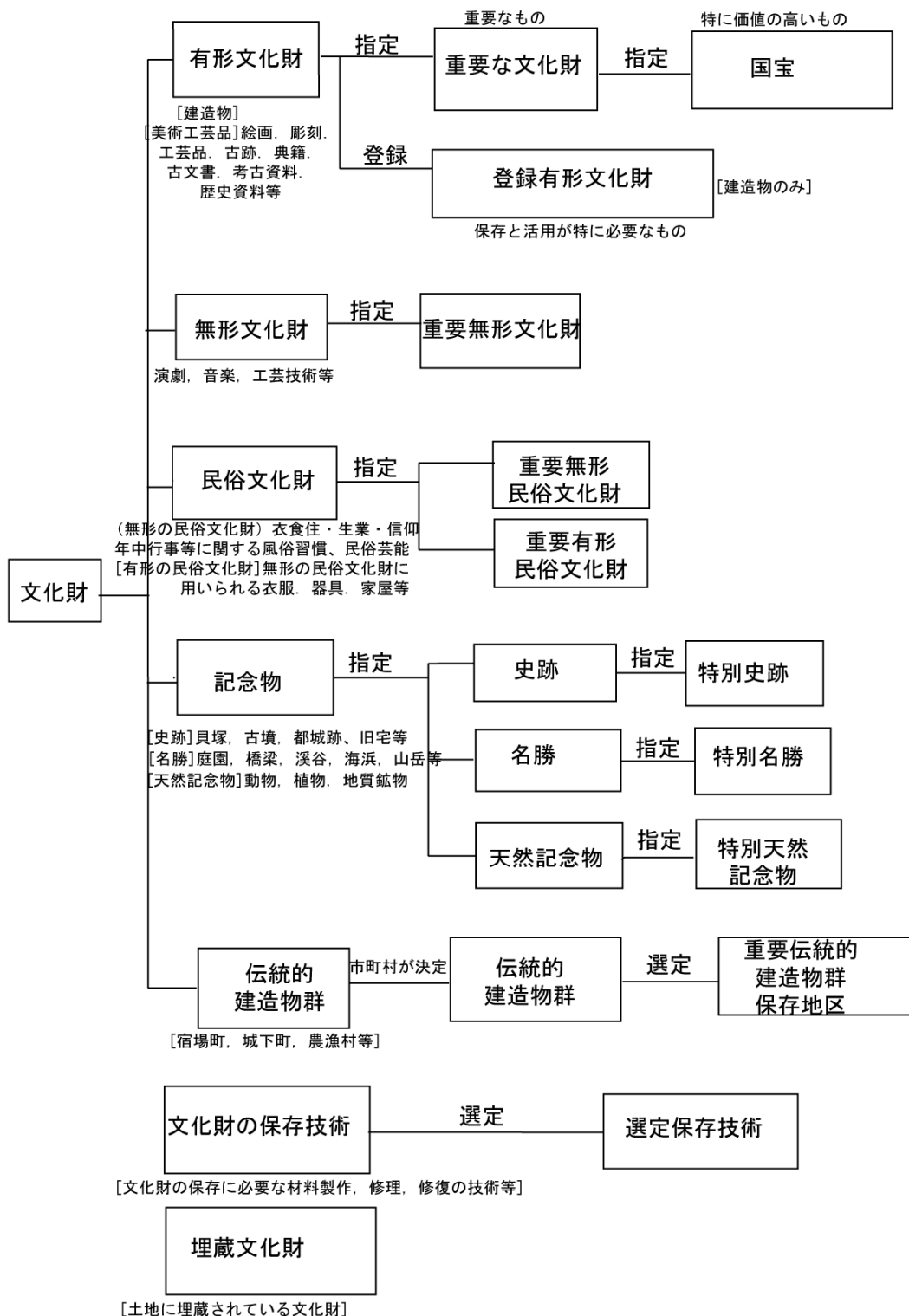


図 2-4 文化財の体系図

出典：文化庁 HP <http://www.bunka.go.jp/bunkazai/shurui/gaiyou.html> 文化財の体系図を引用

2-3-2. 歴史的資源の活用現状

平成 15 年観光立国を原点とした「観光立国行動計画」が決定された以来、全国各地で観光立国に向けた取り組みが沢山行われてきた。観光事業は「最大の産業」とも言われるように、地域の振興に大きな役割を果たす力を持っている。そのため国土交通省としても、さまざまな観光振興施策を展開し観光交流を支援している。

国土交通省では、日本を訪れる外国人旅行者を 2010 年までに倍増させ、年間 1000 万人にするという目標を立てた。その目標を達成するため、平成 15 年度から官民一体となって、欧米やアジアなど世界各地で訪日促進キャンペーン＝「ビジット・ジャパン・キャンペーン」を展開している。更に、地域の経済活性化、生活環境の向上および国民の観光ニーズに応えることを目的とした事業で、多様な地域資源を活用し、地域の幅広い関係者が一体となって観光を軸とした地域づくりと観光交流拡大の観光交流空間づくりモデル事業に取り組んでいる。観光交流空間づくりの成功を後押しするため、インフラ整備などのハード施策と、ディスティネーションキャンペーンなどのソフト施策の両面から、地域の進める事業を支援している。ディスティネーションキャンペーンは J R 6 社グループの指定に基づき、J R、地方公共団体、地元観光事業者の 3 者が一体となって、全国を宣伝対象地域として行う、広域的かつ継続的な観光宣伝事業である（「国土交通省平成 17 年度観光白書」）。

歴史観光に関して、鳥居（2000）は「60 年代以降、都市の個性をどのように創出するかが課題になってきた。それには、その都市の歴史をひも解くことから始まる。残念ながら 60 年代に発展していた都市では、すでにその都市の歴史を証言する建物や歴史的遺産は消えていた。それらは、皮肉なことに、成長に取り残された都市に多く残ったのである。今日、『歴史的遺産』で地域活性化を目指している町は、60 年代以降の成長から取り残された町や地区である」と述べている。

ここでは、「60 年代以降の成長から取り残された町や地区」の歴史観光において、幾つか例を挙げよう。

平成 17 年から福岡市は福岡城の修復・復元を目指す市民運動を行い始め、理解を高めるために鴻臚館・福岡城跡の史跡探訪ラリーに取り組んだ。福岡城跡は 48 万 2 千平方メートルを有し、過去に天下の名城としての天守閣もあり、近くには、日本に残る唯一の外交迎賓館「鴻臚館」跡が出現している。福岡市は「鴻臚館・福岡城」の復元を目指し、市民が文化遺産と触れ合えるための文化イベントの開催や、文化遺産の復元・保全に関する研究・啓蒙、観光促進のた

めの整備などを取組んでいる。³また、鳥取県米子市は、米子城跡が平成 18 年に国史跡に指定された以来、米子城にまつわる史跡めぐりの観光ルートを設けている。⁴そのほか、「学びの旅」の視点から、観光地の歴史、文化、環境の講座を設け、様々な分野から観光地を解き明かし、参加者同士の交流を図る企画―「平成滋賀塾」がある。滋賀県彦根市では、滋賀大学が中心となって「平成滋賀塾」を開催している。これは、11 日間にわたって滋賀地域の歴史や環境を総合的に学習する企画であり、大学研究者による専門的な講義と地域観光が組み合わせられた新しい歴史観光である。従来の歴史観光には乏しかった学術的好奇心を満足させる要素として、大学研究者が持つ専門性を活用する試みとして興味深い。

5

歴史人物を題材にする歴史観光に関しては、秋田県湯沢・横手地域において、江戸時代の紀行家「菅江真澄」を題材に、彼の業績や足跡を訪ねる街道観光を、県内外（特に仙台、関東）からの旅行者の知的好奇心を満たす取り組みとして、平成 17 年から行われている。歴史上の人物が記した過去の旅行記を基に現在の旅を重ね合わせ、過去・未来同時に二つの旅を味わうことの試みは、当時の歴史文化や風土に対する知的好奇心を満足させる新しい観光（街道観光）のモデルケースの 1 つとなった。⁶また、京都府では京都で活躍した歴史上の人物を題材として、その足跡をたどる歴史観光コースを取り組んでいる。現在は源氏物語・平家物語・源義経・小野小町・菅原道真・在原業平・幕末・新選組・坂本竜馬・忠臣蔵・徳川三代・北条時宗・安倍晴明・織田信長 14 コース設けられている。⁷そのほかには、三重県上野市では、俳諧師松尾芭蕉の足跡を辿る史跡・句碑・街道観光を取り組んでいる。⁸

上述した以外にも、日本各地では歴史観光が多く取り込まれてきた。それに関して、平成 17 年度国土交通省の観光白書では、「近年、地域の歴史や文化に注目、学術的な視点を取り入れた新しいコンセプトの歴史観光が日本各地で創

³ NPO 法人鴻臚館・福岡城跡歴史・観光・市民の会ホームページ

<http://fukuokajokorokan.npgo.jp/index.html> 参照

⁴ 米子市市役所ホームページ

<http://www.yonago-city.jp/section/edu/bunka/castle/asset.htm> 参照

⁵ 滋賀大学 平成滋賀塾ホームページ

<http://www.knt.co.jp/jichitai/manabutabi/shiga/index.html> 参照

⁶ 菅江真澄の足跡を活かした地域活性化に関する検討会 「菅江真澄の足跡を活かした観光振興に向けて」～秋田・再発見から北海道・東北への提言～

http://www.thr.mlit.go.jp/akita/ir02/05_susume/project/masuki_teigen/teigen_00.html 参照

⁷ e 京都ねっと（サイト運営・管理会社 株式会社トラット）まると京都ポータルサイト <http://www.e-kyoto.net/sanpo/rekishi/> 参照

⁸ 伊賀上野ケーブルテレビ株式会社 芭蕉と伊賀 芭蕉生誕 360 年 H P

<http://www.ict.ne.jp/~basho/footmark/index.html> 参照

出されている」と記述している。

また、同白書では、「文化財建造物等の保存・活用施策の展開を目指し、歴史的集落・街並みの保存事業と観光とのより成熟した連携について検討を行い、事実上でも、歴史資源の活用はほとんどが観光事業との連携によって行われている」と記述している。歴史資源の活用を観光事業だけではなく、より多くの専門分野との連携やコラボレーションにより、新しい価値観や付加価値の創出が期待される。

2-4. 異分野コラボレーション

前章では、「分野細分化」により生じた様々な問題を解決するには、分野間のギャップを乗り越え、問題を全体的に把握し、解決することが必要だと述べた。その方法論を探るために、研究者たちは既存領域の価値の再構成のためのノウハウ蓄積の試行錯誤を試みてきた。

既存領域価値の再構成の試みについて、異分野コラボレーションのアプローチが挙げられる。異分野コラボレーションについて、久保田、藤井（1995）は「経験と価値観の異なる人々との協同作業を通して、今までとは違うモノの見方を学ぶと共に、問題意識を共有するメンバー間で発想のシナジー効果を生むことにより、創造性を引き出すためのアプローチです」と定義している。

異分野視点の出会いと効果について、久保田、藤井は以下のようにまとめている。3者は明確に区別することができなく、様々なレベルで同時かつ複合的に起こる（図2-5を参照）：

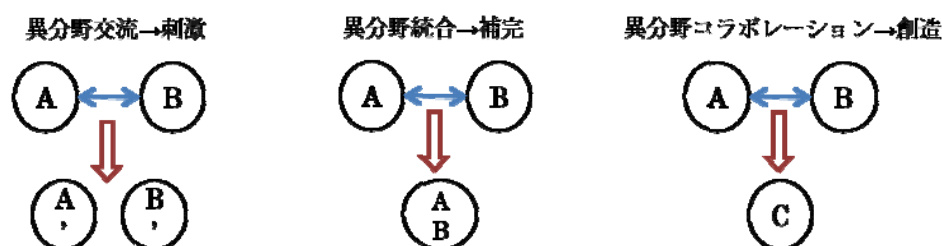


図 2-5 異分野視点の出会いと効果

出典：久保田、藤井（1995）p.99 図 4-1 を引用

異分野コラボレーションの方法論について、久保田・藤田は「同じ目標に対して異なる視点を交錯させ、立体的に問題の本質を浮かび上がらせることにより、付加価値の高いアイデアを相乗的に生み出していく、いわば集団やグループのための発想法です（図2-6を参照）。そしてその経験は、ものごとの本質を立体的に把握する能力や、複眼的に考える能力を育てるために、個人にとっての発想力の強化にもつながっていきます。仕様を決定するモノづくりの初

期段階は、革新的なアイデアを引き出す異分野コラボレーションの方法論は今後ますます重要になると考えられる」と述べている。

図 2-6 異分野コラボレーションによる仕様の決定

出典：久保田、藤井（1995）p.103 図 4-3 を引用

A.T.E プロジェクト

久保田、藤井の『異分野コラボレーション—視点の交錯から創造へ』一書には、A.T.E プロジェクトについて紹介した。A.T.E プロジェクトとは、Art（芸術）、Technology（技術）、Environment（環境）という3つのキーワードを手がかりとして、人間と技術、社会と技術の新しい関係を実践的構築していこうとする活動である。プロジェクトは1992年6月、企業と文化の新しい関係を探りたいと考えていた現代美術のシンクタンクP3 art and environment と NEC コーポレートデザイン部によりスタートした。P3 art and environment は四谷の東長寺地下にギャラリーを持ち、インゴ・ギュンター、三上晴子、蔡国強など、現代テクノロジーに対する洞察性に優れたアーティストの共同制作である。NEC コーポレートデザイン部は1991年1月、企業の文化的価値を「デザイン」という視点から考察、実践していく部署として発足し、CI刷新、企業理念/メッセージ開発、横断的商品デザインアイデンティティ強化活動（グリーンハウスプロジェクト）、ヒューマンインタフェース研究活動、エンジニアリングデザイン部会活動など、NEC 全体のデザイン戦略に関わる活動を行っている。

久保田、藤井はA.T.E プロジェクトの活動を図 2-7 に示している。A.T.E は、アーティスト、デザイナー、エンジニア、科学者などと共に、異分野コラボレーションを軸として、ワークショップや研究活動など様々な活動を実践的に行っている。

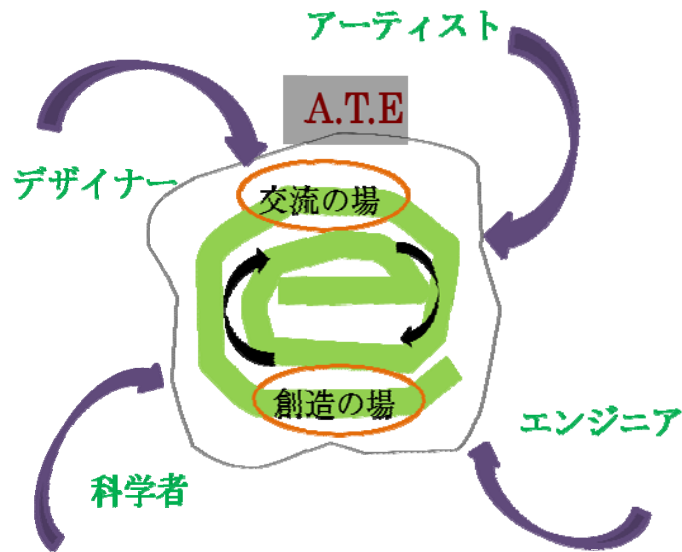


図 2-7 異分野の人々の交流の場と創造の場づくり

出典：久保田、藤井（1995）p.121 図 5-2 を引用

A.T.E プロジェクトの活動内容について、例として「クリエイティブ・スペースワークショップ」を挙げる。「創造的な環境とは何か」「発想力を発揮できる環境とは何か」をテーマに、参加全員が素材を持ち寄り、自分の考えるをクリエイティブ・スペースについてそれぞれ発表を行った。その結果を整理したのち、再度同じテーマでワークショップを行い、全員で議論をしながら、クリエイティブ・スペース形式の核となる諸概念を抽出した。このワークショップには、デザイナー、編集者、エンジニア、キュレーター、プライナーなど、視点の異なる人々が参加し、全員が発表することにより、それぞれの視点の違いが交流する場となった。その他に、インゴ・ギュンター「EXHIBITION ON AIR」ワークショップ、バックミンスター・フラー「構造と安定」ワークショップ、東京大学特別講義/NEC 商品デザイン方法論講義などの活動がある。

2-5. 異分野連携と地域活性化

本論文のタイトルは「異分野コラボレーションによる地域活性化の試み」であるが、今までの地域活性化事業では、明確に異分野コラボレーションの方法論を用いた活動はない。しかし、異なる分野や部門による共同作業・交流・コーディネートを通して、地域ブランド、雇用機会などを創出するといった異分野連携、産学官連携活動は既に多く取り組まれている。

2-5-1. 異分野連携

関智宏（2007 p. 1）は企業の連携事業について、「中小企業の多くは、自社の発展を目指そうとしても、経営資源の不足という中小企業特有の問題に直面する場合がある。こうした問題に直面した場合、中小企業の多くは、経営資源の補填を目的とし、企業はもちろんのこと、加えて大学や研究機関など経営資源を補填可能とするさまざまな組織との連携の構築を図っている」と述べている。日本は、地域の中小企業の新事業活動を促進するため、中小企業を支援する3つの法律、①中小企業の創造的事業活動の促進に関する臨時措置法、②新事業創出促進法、③中小企業経営革新支援法を整理・統合し、また、新たに「新連携」への支援を新たな柱として加え、「中小企業新事業活動促進法」を平成17年4月13日に制定し、予算・税制などの支援措置も含めて、中小企業施策の骨太化を行った。⁹

「新連携支援地域戦略会議」は新連携について、次のように説明している。

『新連携』とは、複数の事業者が異なる事業分野で蓄積したノウハウ・技術等の経営資源を持ち合い、それらが融合することで初めて可能となる事業活動（※新事業活動）を行うことで、新たな需要の開拓（※新事業分野開拓）を行う企業グループを指します。

※新事業活動・・・①新商品の開発又は生産、②新役務の開発又は提供、③商品の新たな生産又は販売の方式の導入、④役務の新たな提供の方式の導入その他の新たな事業活動を指します。「新事業分野開拓」が可能となるような、地域や業種を勘案して新しい事業活動を支援します。ただし、当該地域や業種において、既に相当程度普及している技術・方式の導入、研究開発段階にとどまる事業については支援対象外とします。

※新事業分野開拓・・・新事業活動によって、市場において事業を成立させることを指します。「需要が相当程度開拓されること」が必要であり、具体的な販売活動が計画されているなど、事業として成り立つ蓋然性が高く、そのども事業として成立することが求められます。

新連携への取り組みを通し、自らの強みを発揮できるような様々なプロジェクトに主体的に参加し、他の企業等と連携することにより、独立性・自立性を維持しながら、単独ではできない新たな事業展開を実現することができます。このことにより、経営リスクを抑制しつつ、より大きな成長のチャンスを得ることができる。

独立行政法人「中小企業基盤整備機構」は、新連携と新事業活動について、

⁹ 新連携支援地域戦略会議事務局 中小企業新事業活動促進法、新連携支援制度の解説ページ
<http://www.chubu.meti.go.jp/keiei/sesaku/16shinrenkei/page16-0-shinrenkei-setsumei.htm> を参照

図 2-8 に示している。「新事業分野開拓」に至るまでは、中小企業だけではなく、大学・研究機構など、NPO・組合の共同作業と連携も必要となる。異分野連携は、中小企業の事業拡大、大学・研究機構の研究活動、NPO・組合の公益活動の促進、それらの活動に連れて地域活性化の進展など、様々な方面でのメリットが期待される。

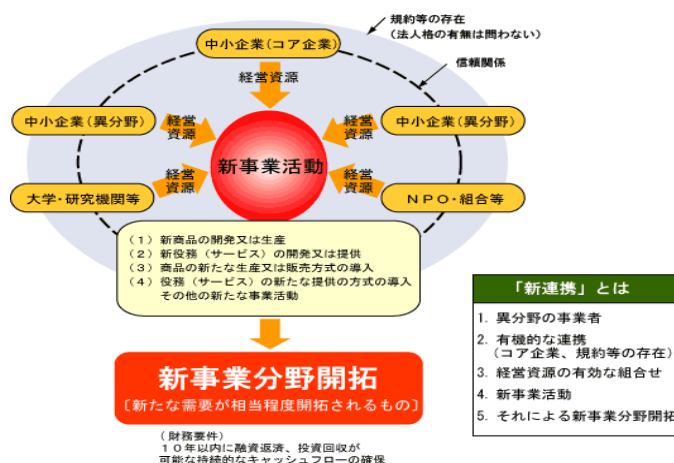


図 2-8 新連携と新事業活動

出典：中小企業基盤整備機構、新連携支援地域戦略会議：新連携とは
<http://www.smrj.go.jp/shinrenkei/about/index.html> の画像を引用

財団法人大阪市都市型産業振興センターは、国における異分野連携施策等の位置づけを図 2-9 にまとめている：

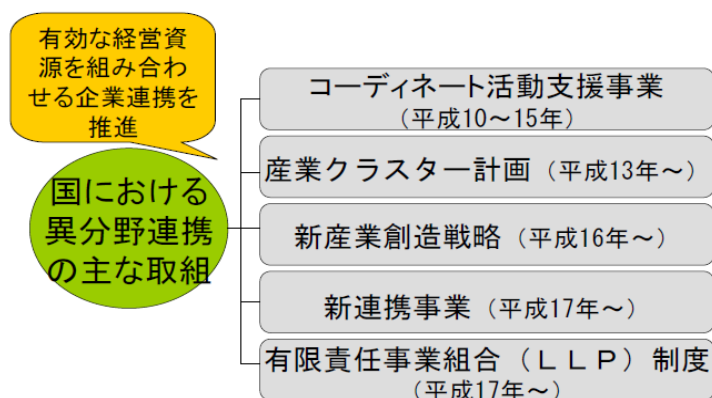


図 2-9 国における異分野連携施策等の位置づけ

出典：財団法人大阪市都市型産業振興センター（2006）
「異分野連携による新産業創造動態調査報告書（概要版）」p. 2 の画像を引用

中小企業のほかに、大学・研究機構も、異分野連携に関する研究活動を取り組んでいる。立瀬（2005 p.1）は、異分野連携の必要性について「価値多様な知識社会において、学術的知識は実践課題の具体的解決の中で融合されなければならない」と述べている。その他、産学連携の場合は、異分野における知のコーディネータの役割が強調されてきた。

平成 18 年内閣官房 地域再生推進室と内閣府 地域再生事業推進室が発行した「地域再生のために一地域が主役―」冊子には、地域再生を「地域経済の活性化、地域における雇用機会の創出その他の地域の活力の再生である」と定めた。また、地域再生の全体像を政策の 3 本柱とそれらに対する支援であると提示した。

政策の 3 本柱とは、

1. 地域再生を担うひとづくり・人材ネットワークづくり。これに対する支援策は、①大学等と連携した地域再生の活動支援（地域の知の拠点再生プログラム）②地域における雇用創造の活動支援③NPO による地域再生の活動支援④株式会社による地域再生の活動支援（出資者への課税の特例）など

2. 補助金改革・地域の自主裁量性尊重・省庁の壁を超えた交付金化・成果主義的な政策への転換。これに対する支援策は①地域再生のための交付金（道、污水处理施設、港）②補助対象施設の転用手続きの一元化・迅速化など

3. 民間のノウハウ、資金等の活用。これに対する支援策は①株式会社による地域再生の活動支援（出資者への課税の特例）（再揚）②日本政策投資銀行の低利融資など

2-5-2. 産学官(公)連携活動

近年、地域活性化をキーワードとする産学官(公)連携活動が盛んでいる。細内（1999）によると、「戦後五十年、地域コミュニティの問題に対して主に行政が対応して来たに対し、政府や自治体は、さまざまな社会サービスの業務が民間に移行される傾向にある」と述べている。そんな中で、社会から存在価値を認めてもらう大学にとって、教育・研究活動に加え、多種多様な社会ニーズに対応する産学官(公)連携活動、地域社会への協力活動は不可欠となった。

日本では、「大学等における技術に関する研究成果の民間事業者への移転の促進に関する法律」（「大学等技術移転促進法」）が平成 10 年 8 月に施行されている。大学の共同研究センターやリエゾンセンター、公的試験研究機関などにおいても産学官連携窓口を設け積極的に連携に取り組む機関が増え、これまで産学官連携とは縁がなかったというような企業にとっても身近なものになりつつあ

る。¹⁰

国立大学等（大学共同利用機関、高等専門学校を含む）については、国立大学法人法等関係6法に基づき、平成16年4月から法人化している。国立大学法人法においても産学官連携は国立大学法人の重要な役割の一つとして位置付けられている。¹¹

また、平成18年内閣官房 地域再生推進室と内閣府 地域再生事業推進室の冊子「地域再生のために一地域が主役」にて、大学は、地域の人材・知識が集積する知の拠点であると定めた。地域を再生させるためには、地域が大学と連携した地域づくりを進めていくことが重要であると提示した。大学と地域が連携した地域再生の取組を省庁が連携して支援するため、平成18年2月にとりまとめた「地域の知の拠点再生プログラム」を35施策に拡充した。

2-6. 知識創造プロセスと場、リーダーシップ

野中・竹内（1996）は、知識が「暗黙知」と「形式知」の社会的相互作用を通じて創造され拡大されると述べている。また、この暗黙知と形式知の相互循環は、「知識変換」と呼ばれ、「共同化」、「表出化」、「連結化」、「内面化」4種類の知識変換モードを提示している（野中・竹内 1996 p.90～92）。

野中・梅本（2001）は、「組織の知は、この四つのモードをめぐるダイナミックなスパイラルによって創られる」とし、この四つの知識変換モードのイニシヤルを取ってSECIモデルを提示した（図2-10）。

また、野中・梅本（2001）は、「場」の定義として「その中で知識が創造・共有・活用されるコンテキスト」と述べている。「場」と言うのは、物理的空間（オフィスなど）をはじめ仮想空間、特定目的などを共有している人間関係などのいずれでもありうる。それゆえ、ワーキンググループ、電子メール、グループ、顧客との接触など様々な「関係性」の中に存在する（野中・紺野 1999 p. 163～p. 174；遠山・野中 2000）。

こうした場には、SECIモデルの共同化・表出化・連結化・内面化に対応する創発場、対話場、システム場、実践場の4つのタイプがある。これらの場を理解するキー・コンセプトは、相互作用であり、以下のような特徴がある。

- ・ 「創発場」：リアルな直接対面の相互作用
- ・ 「対話場」：グループによるリアルな直接対面の相互作用

¹⁰ 関西広域連携協議会 産学官連携インデックスHP

<http://www.kippo.or.jp/sangakukan/how/index.html> 参照

¹¹ 文部科学書 HPhttp://www.mext.go.jp/a_menu/shinkou/sangaku/main7_a5.htm 参照

- 「システム場」：間接的な集団的な相互作用
- 「実践場」：形式知と行為の相互作用

このうち、共同化と表出化に対応する創出場と対話場では、電子的に伝達が難しい暗黙知を扱うので、リアルな場で直接顔を合わせることが重要である（野中・梅本 2001 p.7）。

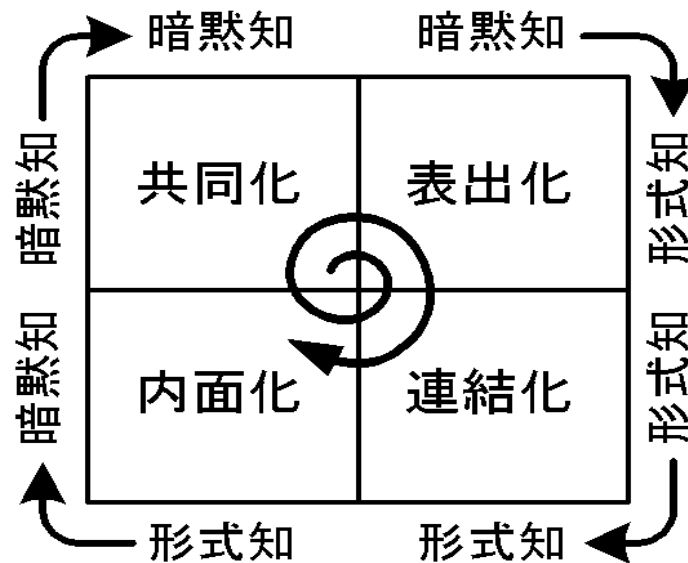


図 2-10 SECI モデル

出典：野中・梅本（2001）p.5 図 2 を引用

また、遠山・野中（2000 p.5~7）は、場は「創造される知識の質を決定する」と考え、「よい場とはなにか」という問題意識から、次の九つの条件を示している。

- ① 独自の意図、目的、方向性、使命等を持った自己組織化された場所である。
- ② 参加者のコミットメントが必要である。
- ③ 参加者に内部と外部からの二つの視点を同時にもたらす。
- ④ 参加者が直接経験をすることができる。
- ⑤ 物事の本質に関する対話が行われている。
- ⑥ 境界が開かれている。
- ⑦ 参加者は製品コンセプトや製造マニュアルといった形式知を、実践を通じて自己に体化することができる。
- ⑧ 異種混同が起こっている。
- ⑨ そして知識創造リーダーシップの基本は「よい場」を作ることにあるとしている。

最後に挙げた知識創造リーダーシップは、リーダーのタイプに拘わらず「よい場」をつくるために「場を活性化する能力」が必要不可欠である。野中（1999 p.48）は、「知を創るためのリーダーシップは、組織的知識創造に関わるすべての人に求められる資質とし、これからのリーダーシップのあり方は、知識創造という観点から再構築すべきなのである」と述べる。

第3章 「遍プロジェクト」の事例分析

3-1. はじめに

本章では、石川・金沢地域の歴史資料—『梅田日記』を活用し、歴史学的世界観の形成および歴史学と情報、観光分野などとの融合を目指した地域プロジェクト「遍プロジェクト」の事例分析を行う。最初に『梅田日記』の概要を紹介した後、「遍プロジェクト」に関して、プロジェクト発足から今までの活動を関係者へのインタビューと筆者自身の実体験を交えて記述していく。

3-2. 「梅田日記」の概要

「梅田日記」（図 3-1 を参照）は、江戸時代幕末期の元治元年（1864）6 月 15 日から慶応 3 年（1867）正月までの間、金沢町人能登屋甚三郎（梅田甚三久）が書いた「日記」である。

「梅田日記」は昭和 45 年（1970）若林喜三郎金沢大学教授（当時）により『梅田日記—幕末金沢町民生活風物誌』（北国出版社）として翻刻・刊行されている。若林氏の解説によれば、日記の筆者である甚三郎は、能登口郡番代手伝を務め、今日でいうなら農政関係の下級公務員という職業の「極めて平凡な一庶民」であった。庶民であるからこそ、彼が日々の仕事や事件、衣食住、交際、行事、行楽などについて記録したこの文書は、当時の庶民の姿を生き生きと伝え、人々にこの街を舞台とした新しい歴史学的世界観の形成を促す貴重な学術資料となった。

図 3-1 「梅田日記」の表紙と梅田甚三久

以下に、「梅田日記」中の庶民生活に関する記述の一部を示す（梅田ぶろぐ 慶応元年 5 月 11 日日記原文を引用）。

朝、風呂に行く。

中納言様、昨夜高岡（富山県）に泊り、今日 15:00 過に帰城された。

追記：御供廻の御先三品は、御弓が無く、御鉄砲 40 挺、御鳥毛 20 本。

御先押 村井又兵衛様、御横目 溝口判太夫様

御中押 岡嶋左膳様、中黒六左衛門様

御用部 山崎守衛様、御横目 今村五郎兵衛様、加藤三郎左衛門（様）

✍

ほかは覚えていない。

この行列を森本（下）町の清水屋喜助宅で拝見した。その後、私と、針屋次右衛門殿、有松屋弥一郎殿、新川糸吉殿の 4 人連れで、味噌蔵丁から百間堀を通り、本多播磨守様下屋敷を経て、犀川上流の九里覚右衛門様の屋敷前に出た。糸吉は今日江戸から帰ってきた縁者・広岡某の家へ向かい、残った私、次右衛門、弥一郎の 3 人は、犀川上流の一文橋を渡ってごりやを見かけた。さて、このごりやの上のほうには、魃氏（うぐい）を養殖していると言う大池があり、そこに屋形船が一艘浮かんでいたのので、3 人でその船に乗ってしばらく船遊びをした。それから、野田寺町の十一屋へ行って草花屋で草花を見物した。その後、寺町の鰐屋（鰐甚）を訪れ、夕食の宴となった。メニューは次の通り。

煎茶、煙草盆、燭台には 20 目懸のろうそく

一鉢：鱈（キス）の細作りに木瓜（きゅうりカ）、海素麵（海藻）

一鉢：くじ鯛の煮立

吸物：鯛

飯

汁：くずしのすまし汁

煮物：麩、妻白（春菊）、松露、鯛

✍

料金は銀 20 目。さてまた、南丁の松本屋へ立ち寄り、蒸菓子色々注文して麦湯や白湯、あるいは好みに応じてお茶などを飲み、料金を払って店を出た。また、帰りがけには犀川沿いで狂談がたくさんあったけれど、ここには書かないで置く。帰宅は午前 0:00 頃であった。

今日、井村小太郎殿のお宅へ舞鶴 1 袋を持って、老母の病気お見舞いに行った。

原文

五月十一日 雨晴揚、曇、甚冷風之事

一、朝風呂ニ罷越候事

一、中納言様夜前高岡御泊り、今日八半時過御帰城之事

附リ、御供廻り御先三品ハ御弓無之、御鉄砲四拾挺、御鳥毛廿本之事

御先押 村井又兵衛様 御横目 溝口判太夫様

御中押 岡嶋左膳様 中黒六左衛門様

御用部 山崎守衛様 御横目 今村五郎兵衛様 加藤三郎左衛門

✎

右之外覺無之事

右御行列森本町清水屋喜助方二而拝見いたし、夫より此元・針屋次右衛門殿・有松屋弥一郎殿、新川糸吉四人連二而両味噌蔵丁より百聞堀相通り、本多播磨守様家中より犀川之上九里覺右衛門様御屋敷前江出テ、糸吉義、今日江戸表より罷帰り侯縁者廣岡何某与𦔻、申方へ罷越、扱此元・次右衛門・弥一郎三人二相成、犀川上之「文橋打渡りごりヤー見いたし、扱又上ミ之ごりヤニうぐいを作り候所とて、大池有之、此所二家形舟壺艘浮ミ居申=付、三人共右船二乗、暫時相慰ミ罷在、夫より野田寺町十一屋江罷越、草花屋二入草花見物いたし、夫より寺町鏝毘江趣、一盃并夕飯共いたし、酒肴出物左之通

煎茶 たばこ盆 燭台 廿日懸之蠟燭

壺鉢 きす 細作りこ木瓜 うミそうめん

壺鉢 くじ鯛 煮立

吸物 鯛

飯

汁 すまし くずし

煮物 麩 妻白 松露 鯛

✎

右之通二而代銀廿目之事、扱又南丁松本屋江立入、蒸菓子色々為指出、麦湯或ハさ湯又好ミニよって茶二而も吞杯いたし、代銀相払罷出、其外犀川こおゐて戻り懸狂談沢山有之候へ共記略いたし候、帰宅ハ彼是九ツ時頃之事

一、 今日井村小太郎殿方へ舞鶴壺袋持参、老母病氣見舞二罷越来り候事

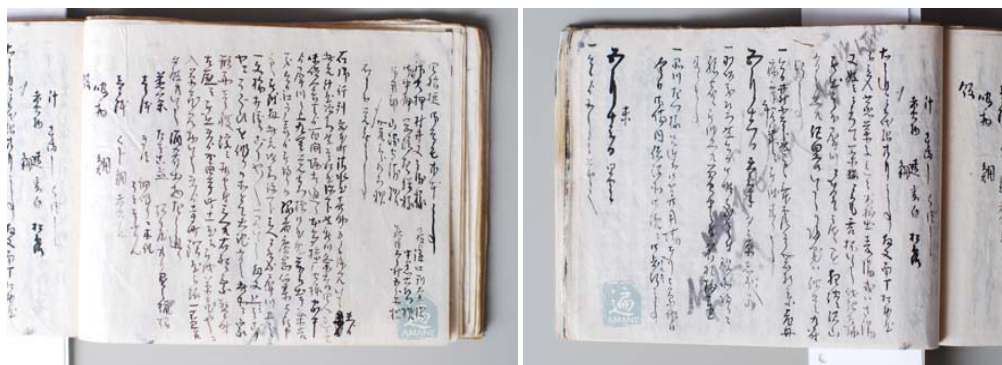


図 3-2 梅田日記原文画像（一部）（慶応元年 5 月 11 日）

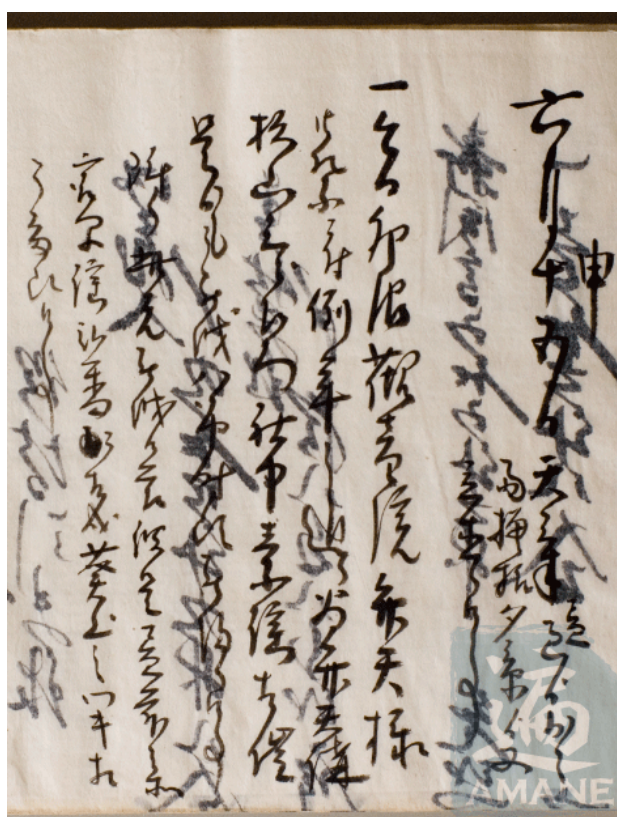


図 3-3 梅田日記原文画像（一部）（元治元年 6 月 15 日）

3-3. 「遍プロジェクト」

3-3-1. 「遍プロジェクト」の概要

「遍プロジェクト」は、2006 年 12 月に発足し、北陸先端科学技術大学院大学・金沢大学大学院・金沢星稜大学の各機関から、歴史、情報、観光分野などの専門家が参加した学術プロジェクトである。「遍プロジェクト」は歴史資料を単なる学術資料としてではなく、人々に歴史学的世界観の形成を促す貴重な情報資

源として位置付け、地域ブランドの創出、観光振興、地域活性化を目指している。これまで遍プロジェクトでは、「梅田日記」を題材としたデジタルコンテンツ制作（北陸銀行金沢支店金融歴史資料館）や、セマンティック Web 技術を用いた「梅田日記」の Web コンテンツ化（「梅田日記ぶろぐ」<http://amane-project.jp/>）を行い、地域に誇るべき情報資源としての「梅田日記」を再認識する活動を行ってきた。



図 3-4 「遍」のロゴ

3-3-2. 「遍プロジェクト」の活動

「遍プロジェクト」は 2006 年発足から今まで、地域固有の歴史資源をより多様な分野・目的において活用するという観点から、デジタルコンテンツ・食品・観光などの様々な分野において、新しい歴史資料の活動の提案・企画を行ってきた。

「遍プロジェクト」開始に至るまでのきっかけを探るため、筆者は 2008 年 8 月 21 日に「遍プロジェクト」のメンバーに対するインタビューを行い、諸要素を以下のようにまとめた：

- 主観的要素
歴史資料の有効活用・IT の有効活用・社会への貢献
- 客観的要素
 1. 歴史分野にはまだ IT 技術を充分には使っていなかった
 2. IT 技術を歴史分野に使う提案
 3. 石川県の歴史的町並み、資料の保存が相対的に良い状態である
 4. 身近に歴史専門家がいる
 5. 「梅田日記」の使用権利の獲得

「遍」年表：

- 2006 年 12 月 歴史と情報の仕組みで「遍プロジェクト」発足

- 2007 年 4 月 観光情報学研究者メンバーとして加わる
- 2007 年 4 月 「梅田日記ぶろぐ」 試作版運用開始
- 2007 年 5 月 17 日 「梅田日記ぶろぐ」 試験公開
- 2007 年 5 月 e-messe kanazawa 2007 へ出展
- 2007 年 7 月 第 59 回ビジネスショウ TOKYO2007 へ出展
- 2007 年 8 月 24 日 北陸銀行金沢金融歴史資料館で梅田日記のお金に纏わる部分をタッチパネルで紹介
- 2007 年 8 月 24 日 「朝日新聞」では「幕末の庶民日常詳細に「梅田日記」ブログになる」という記事でブログを紹介
- 2007 年 9 月 「梅田日記ぶろぐ」 公開版運用開始
- 2007 年 10 月 6 日 リージョナル・ツーリズム・フォーラムで発表
- 2007 年 11 月 4 日 第一回遍フォーラム開催
- 2007 年 11 月 17 日 梅田日記観光ツアー「梅田日記に見る幕末金沢の街・人・時間を訪ねる旅」実施
- 2008 年 3 月 第 1 回遍フォーラム研究成果報告書 完成
- 2008 年 3 月 あまね WiKi 開始（活動の中で得られた知識を公開するために）
- 2008 年 4 月 7 日「ユニバーサルな知識表現による地域歴史観光 ICT の開発」が総務省「戦略的情報通信研究開発推進制度（SCOPE）」に選ばれる
- 2008 年 4 月 18 日 「毎日新聞」の記事「幕末の役人・梅田甚三久の日記 ユニークな内容で金沢を発信」に「遍プロジェクト」が紹介され
- 2008 年 5 月 21 日「梅田日記」の再現料理試食会が居酒屋「笑宿」で（梅田甚三久の子孫が招いて開いた）催した
- 2008 年 6 月 6 日 国土交通省平成 20 年度「ニューツーリズム創出・流通促進事業」が「梅田日記」をもとにしたモニターツアーを採択
- 2008 年 6 月 14 日 第 2 回遍フォーラム「梅田日記を探る・活かす・楽しむ ～歴史資料の活用とこれから～」
- 2008 年 7 月 15 日 第 60 回ビジネスショウ TOKYO2008 へ出展
- 2008 年 7 月 31 日 第 1 回 SCOPE 委員会
- 2008 年 8 月 9 日 かなざわ・まち博 2008 金沢散歩学として、「梅田日記」ゆかりの寺院と観音院の四万六千日（東山界隈）」開催
- 2008 年 8 月 28 日 第 2 回 SCOPE 委員会
- 2008 年 9 月 26 日 第 3 回 SCOPE 委員会
- 2008 年 9 月 27 日・28 日 国土交通省平成 20 年度ニューツーリズム創出・流通促進事業「幕末金沢の庶民の暮らし - 梅田甚三久日記が描く旅 - 」実施
- 2008 年 10 月 24 日 第 4 回 SCOPE 委員会
- 2008 年 11 月 11 日 北陸先端科学技術大学院大学 遍プロジェクトとして、第 4 回

F I T ネット商談会へ出展

- 2008 年 11 月 28 日 第 5 回 SCOPE 委員会
- 2008 年 12 月 25 日 第 6 回 SCOPE 委員会

3-3-3. 「梅田日記ぶろぐ」の発信

「遍プロジェクト」は歴史資料のデジタルコンテンツ化を提案した。しかし「梅田日記」をはじめとする歴史資料の多くは「くずし字」と呼ばれる文字で記述されており、歴史学研究者以外が直接解読・理解することは困難である。また、出現する単語や内容全体の正確な把握・理解には、当時の時代背景や社会情勢および文化風俗に関する歴史学的理解が不可欠である、これらのことから、歴史資料を基により多くのデジタルコンテンツを構築・配信するために、専門性・学術性が高い歴史資料を如何に一般人が理解できる形式で提供するか、非常に重要な課題となった。

その中で、遍プロジェクトは、「梅田日記」の歴史観光分野への活用として、情報コンテンツ技術を用いた歴史資料のブログ配信「梅田日記ぶろぐ」を提案した（図 3-5 を参照）。そして「遍プロジェクト」の情報技術者達は、歴史研究者、観光専門家とのコミュニケーションを通して、「梅田日記ぶろぐ」の構築に取り組みはじめた。

2007 年 4 月、「梅田日記ぶろぐ」試作版が運用開始、翌月の 17 日、ブログの試験公開が行われ、同年九月、公開版運用を開始した。当提案により、これまで歴史観光の素材として扱われていなかった地域に現存する歴史資料の価値を再確認することができた。



梅田日記ぶろぐ表紙

口語訳と翻刻と原文画像

図 3-5 梅田日記ぶろぐ

これまで、インターネットにおける歴史資料の公開は、学術機関のデジタルアーカイブを中心に行われてきた。しかしそれらは、歴史学研究者のような専門家を対象としており、観光客が公開資料を閲覧しその資料と関連が深い観光地に興味を抱くことは困難であった。それに対して「梅田ぶろぐ」では、歴史資料を現代人にとって最も身近なデジタルコンテンツの一形態であるブログ形式を採用することにより、若年層などより広く一般に対して、「梅田日記」の持つ魅力をアピールすることができた。

筆者は「遍プロジェクト」のリーダーである堀井 洋氏（北陸先端科学技術大学院大学 助教）に対するインタビューを行ったところ、プロジェクトチームは「梅田日記」を歴史観光コンテンツの素材として捉え、作者である梅田甚三久が庶民であるという特長・利点を重視したことをわかった。日本各地の歴史観光について、堀井氏は次のように述べた：

「これまで、日本各地における歴史観光では、僧侶などの偉人や武士・貴族などの上流階級を題材とする所謂『お殿様観光』が一般的であり、石川・金沢地域においても『加賀百万石』の言葉に象徴される加賀藩前田家およびその家臣を主題とした歴史観光が主流だった。しかしながら、彼らの生活や価値観・考え方は、現代社会に暮らす我々のそれとはかけ離れたものであり、彼らを主題とした歴史観光から、実際にその地域に暮らしていた人々の生活や文化を理解し、共感することは困難であった。それに対して、梅田甚三久は極めて平凡な一庶民であったために、『梅田日記』を題材とした歴史観光コンテンツを通して彼の日常や彼が暮らした時代を理解し、現代人が共感を覚えることが期待される」。

歴史学研究者による歴史資料の解析

堀井（2008 p. 4）によると、「遍プロジェクト」では、「歴史研究者と情報技術者が各自の専門分野知識を活かし、作業を分担・協力して歴史資料のデジタル化に取り組んでいる」。歴史学研究者が行う歴史資料の解析作業について、図3-6に概要を示す。歴史学研究者は、歴史学の知識を基に原文画像から記述内容の翻刻（活字化）を行い、現代人が理解するために解説が必要な語句を抽出する。更に、翻刻された情報を基に口語訳文を作成するが、時刻表現や地名など江戸時代固有の表現・記述を現代の表現に置き換え、宗教的行事など当時の社会的・文化的背景に関する解説が必要な場合には、それらについて解説を行う。

図 3-6 歴史資料の解読プロセス

出典：堀井、林、沢田、堀井、吉田（2008）p. 30 図 3 を引用

また、昨年 8 月 21 日プロジェクトメンバーに対するインタビューから、「梅田日記ぶろぐ」が及ぶ効果について、以下のような回答を得た。「梅田日記ぶろぐ」の発信は、普段歴史資料に触る機会の少ない若年層に対して、「梅田日記」の持つ魅力をアピールすることを可能とした。ブログ形式の利用は、「歴史離れ」の傾向にある若年層に対し、歴史資料の面白さを伝えることで、歴史教育の一環として有意義である。

「梅田日記ぶろぐ」は、歴史資料をデジタルコンテンツ化する過程において口語訳やアノテーション（注釈）を付与することにより、社会的・歴史的背景を含めた歴史資料の理解が促進される。デジタルコンテンツでは、原文画像上への画像の貼り付けや重要部分の拡大表示などの理解支援のために多様な情報提示が可能となり、一般人に対して歴史資料の魅力を伝える上で有効である。

しかし、梅田日記ぶろぐの構築には、課題もいくつかある。堀井 氏によると、歴史資料のデジタルコンテンツ化における煩雑さ・要する時間、及び古文書などの歴史資料に出現する旧字や特殊文字などを、UTF-8 などの既存フォントセットで表現することの困難さなどは現実に存在する課題である。

「梅田日記ぶろぐ」の閲覧状況について、2007 年 7 月からインターネット上において公開してから、11 月までの閲覧状況として、「梅田ぶろぐ」への合計訪問回数は約 7300 回であり、インターネット上において一定の認知がされたものと推測される（表 3-1 を参照）。特に 11 月アクセスが集中しているが、これは「梅田日記」に関するフォーラムを 11 月上旬に開催したことの影響であると考えられる。このように、歴史資料をデジタルコンテンツ化しインターネット上で公開しアクセス傾向を分析することで、その歴史資料に対する社会的な認知度や興味の傾向を客観的に把握することが可能となる。

表 3-1 には各月のアクセス数を表す。訪問回数とは各月に閲覧した利用者の延べ人数である、ページ数とは、閲覧されたページ数の合計である。さらに、ヒット数とは Web サーバに対して要求された全てのファイルの合計である。これらには、検索エンジンロボットのアクセスは含まれてない。

表 3-1 「梅田日記ぶろぐ」のアクセスログ解析結果（2007 年 7 月～2007 年 11 月）

月	訪問回数	ページ数	ヒット数
2007 年 7 月	920	32,211	53,412
2007 年 8 月	879	9,564	21,300
2007 年 9 月	562	3,367	7,775
2007 年 10 月	830	4,064	13,083
2007 年 11 月	4,155	8,068	18,588
合計	7,351	57,613	115,324

出典：堀井、林、沢田、堀井、吉田（2008） p. 32 表 1 を引用

表 3-2 は 2008 年 4 月から 12 月まで「梅田日記ぶろぐ」のアクセス数を示す。

表 3-2 「梅田日記ぶろぐ」のアクセスログ解析結果（2008 年 4 月～2008 年 12 月）

月	訪問回数
2008 年 4 月	2,128
2008 年 5 月	1,688
2008 年 6 月	1,122
2008 年 7 月	896
2008 年 8 月	1,002
2008 年 9 月	832
2008 年 10 月	718
2008 年 11 月	794
2008 年 12 月	1,700
合計	10,880

3-3-4. 第1回遍フォーラム開催

2007年11月4日遍プロジェクトは、北陸先端科学技術大学院大学・金沢大学大学院・金沢星稜大学の協力を得て、第1回フォーラム「幕末の金沢を知る 梅田甚三久とその時代」を開催した。フォーラムでは、学術的な視点から「梅田日記」および幕末の金沢に焦点を当て、専門家による講演・講義を行った。フォーラムを通じて、歴史学研究家・情報技術者・観光情報学研究者が同じテーマについて議論と交流の場を設けられ、挑戦的かつ興味深い試みであった。フォーラムでは、元金沢市史専門員 長山直治氏が基調講演（演題：「梅田日記と幕末の金沢」）、金沢大学大学院人間社会環境研究科客員研究員 宮下和幸氏が講演（演題：「幕末期の加賀藩」）を行った。



図 3-7 第1回フォーラムの様子

第1回遍フォーラムは62名（関係者を除く）の方が参加しており、うち事前申込み者が49名（内7名欠席）、当日参加者が20名であった。また、「梅田日記」の認知度や遍プロジェクトの活動に対する関心度などを調査するために、当日は第1回フォーラムのアンケートを実施した。アンケートの内容は以下のようである。

図 3-8 第1回遍フォーラムアンケートシート

62名の参加者の内、44名からアンケート回答を得た。44名の内男性31名、女性13名であった。図3-8は当日参加者の男女別年齢層を示す。図3-8から参加者は若い人が少なく、高齢者の参加が多いことがわかった。どういう風に若い人に歴史資料の魅力を伝え、歴史観光に興味を引き寄せることは今後の課題となった（さらに詳しいアンケート結果は附属資料①を参照）。

図 3-9 第 1 回フォーラムの男女別年齢区分

出典：沢田（2008）『第 1 回フォーラム研究成果報告書』 p.3 図 2 を引用

図 3-9 は遍フォーラム開催の情報源と「梅田日記」の認知度のデータを示すものである。参加者の多くは歴史に関心度が高い地域住民であることがわかった。地域住民の遍プロジェクトの活動への参加は、歴史資料を活用した地域活性化の第一歩であり、今後もフォーラムなどのイベントを通して、地域住民と研究者の交流の場を設け、地域住民の意見を参考にした活動を行うことが必要であることがわかった。

図 3-10 遍フォーラム開催の情報源と「梅田日記」の認知度

出典：『第 1 回フォーラム研究成果報告書』 p. 3 図 3 と図 4 を引用

3-3-5. 「梅田日記に見る幕末金沢の街・人・時間を訪ねる旅」

の実施

歴史観光ツアーを通して、観光客に梅田甚三久の世界を体験させるために、遍プロジェクトは「梅田日記に見る幕末金沢の街・人・時間を訪ねる旅」というテーマで、第1回遍ツアーを開催した。

ツアーの開催概要は以下のようである：

- ・ 日時：平成19年11月17日 14:00～
- ・ 場所：金沢市ひがし茶屋街
- ・ 主催：リージョナル・ツーリズム・フォーラム
- ・ 共催：遍プロジェクト

ツアーのコース内容は以下のようである：

梅の橋 → 寿経寺 → 観音院 → 東山蓮如堂 → 宝泉寺 → 久保市山乙
剣宮（跡） → 多聞天（宇多須神社） → 来経寺 → 西養寺 → 誓願寺 → 龍
国寺 → 即願寺 → 愛宕町（ひがし茶屋街） → 仲の橋 → 母衣町 → 主計町
→ 新丁（町） → 懸作（橋場町） → 浅野川大橋

本コースは金沢市観光ボランティアガイドまいどさんが日常的に観光客を案内している観光ルートであり、ツアーはまいどさんの解説によるガイドツアーだった。しかし、雨天であったため、ツアーは中止となった。



図 3-11 第1回遍ツアーの様子

筆者は当日参加者に配布する観光ルート図（図3-11を参照）を作成し、携帯電話でアクセスできるQRコード

（http://amane-project.jp/amane_work/?page_id=59）を入れた。QRコード（図3-12を参照）にアクセスすれば、当日の観光ルートに関する情報が携帯サイドから見られる。しかし雨天や使い方の説明不足により、参加者はQRコード及び携帯コンテンツを十分うまく活用することはできなかった。



図 3-12 観光ルート図



図 3-13 携帯サイドで見られるツアー情報

筆者は遍プロジェクトの一員としてツアーに参加し、当日のでき事と問題を次のようにまとめた：

運営について

- ① 天気は晴から急に雨に変わり、参加者ほとんどが傘を持っていなかったため、中途解散となった。
- ② まいどさん3人はそれぞれ違う特徴を持っている。解説のスピードにより早いグループは先頭で15分も待つ状況が発生した。
- ③ 参加者全員を本番開始直前にグループ分けしたため、時間をかかり、混乱する場面もあった。

コースの設定について

- ① 時間は二時間だったが、一部高齢者や普段長い歩きに慣れていない参加者に対しては長いかもしれない。
- ② まいどさんの解説は梅田甚三久のキャラクターを感じられなく、梅田日記の特別点を出していない。
- ③ 言葉だけの説明は面白さが足りない。
- ④ 地図とQRコードの活用は十分できていない。
- ⑤ 雨天に関する告知がなかったため、参加者は混乱していた。

3-3-6. あまね WiKi 運用開始

2008年3月27日、あまね Wiki の運用が開始した。あまね Wiki (AMANE Wiki) は、遍プロジェクトの活動と、その中で得られた情報を整理・公開するサイトである。

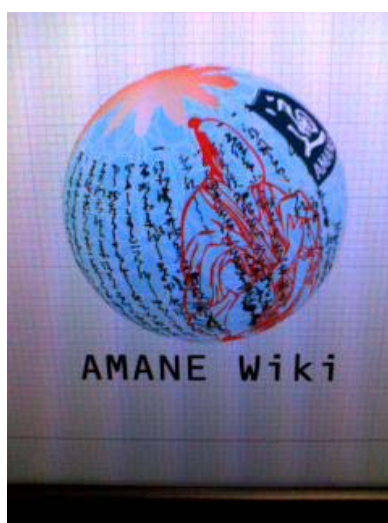


図 3-14 あまね WiKi

3-3-7. 「梅田日記」の再現料理試食会―「遍夜」の開催

遍プロジェクトでは、郷土の歴史を語り合いながら地域ブランド創出のための交流の場となるような再現料理試食会「遍夜（あまねないと）」を提案した。2008年5月21日「梅田日記」の再現料理試食会が居酒屋「笑宿」で（梅田甚三久の子孫が招いて開いた）催した。遍プロジェクトは、つぐま たかこ（フードコーディネーター）さんと、西村 豊（笑宿 料理長）さんの協力により、慶応元年四月二十七日の日記に記した料理の再現を実現した。

慶応元年四月二十七日の日記からの再現料理メニューは以下のようなものである：

一鉢「蓮根・ふき・玉子とじ」

蓮根とふきを、甘めのだしで炊いて玉子とじにしました。蓮根はアクを抜かず使っていたのは？と思い、あまりアクを抜かずそのまま使っています。

一鉢「おり菜の塩漬けに酢醤油」

福井の勝山で栽培されている「勝山水菜」のことを、地元ではおり菜と呼んでいるそうです。京都の水菜と違って漬物として使われることが多い、茎のしっかりした青菜です。当時は保存食として塩漬けにしていたと考えました。軽く塩したあと、江戸時代の製法を再現したという「粕酢」の酢醤油をかけています。

一鉢「刻み昆布と油揚げの煮立物」

細く刻んだ昆布と油揚げの煮物「煮立て」とあることから、熱々のものをさっと出したものだと考え、煮ばなを召し上がっていただきます。

厚物椀に盛ったそうめん

呑んだあとの麺類は、今も昔も変わらずおいしいものだったようです。季節的に、冷たいそうめんぶっかけで。シンプルに仕上げています。

一鉢「蓮根のおろし蒸立を小ふかし程ずつにして盛り、白砂糖をかける」

「茶口取」として書かれている一品。おそらくデザートのような雰囲気で作られたもの。地元の蓮根は粘りがあるので、つなぎを使わなくても、この弾力になります。砂糖は当時貴重なものだったと思われるのですが、あるじが奮発したのか、「白砂糖」をかけて、とあります。

再現料理試食会（2008年5月21日）

慶応元年四月二十七日の日記から



図 3-15 「遍夜」の様子

3-3-8. 第2回遍フォーラム開催

2008年6月14日第2回遍フォーラム「梅田日記を探る・活かす・楽しむ ～歴史資料の活用とこれから～」は、石川県立音楽堂にて開催された。当日の参加者は約70名であった。

図 3-16 第2回フォーラムの様子

第2回遍フォーラムは以下のような内容で行われた：
基調講演 かつおきんや：「梅田日記」がくれた創作意欲
朗読 本田 和：「らくだは空をとんだか」
パネルディスカッション テーマ 「歴史資料の活用とこれから」

3-3-9.「幕末金沢の庶民の暮らし - 梅田甚三久日記が描く旅

- 」の実施

2008年9月27日、28日遍プロジェクトは「幕末金沢の庶民の暮らし - 梅田甚三久日記が描く旅」として、「梅田日記」に登場する140年前の庶民の暮らしを訪ねるモニターツアーを実施した。

本モニターツアーは歴史資料「梅田日記」を基にして、幕末金沢の庶民の暮らしを体験する多彩なプログラムで構成されており、歴史に詳しくない人でも楽しめるものであった。

1. モニターツアー実施者の概要は以下のようである：

表 3-3 モニターツアー実施者概要

(1)事業名	幕末金沢の庶民の暮らし - 梅田甚三久日記が描く旅 -		(2)都道府県名	石川県
			(3)市町村名	金沢市
			(4)地区名	
(5)組織・団体の名称	国立大学法人北陸先端科学技術大学院大学 知識科学研究科 遍プロジェクト			
(6)組織・団体の構成メンバー	堀井 洋・沢田史子・堀井美里・吉田武稔・Ru Da（北陸先端科学技術大学院大学 知識科学研究科 遍プロジェクト） 田中 孝範（株式会社石川県旅行業協会）			
(7)旅行業者名	株式会社 石川県旅行業協会 第（2）種旅行業登録			
(8)代表者	団体名	国立大学法人北陸先端科学技術大学院大学 知識科学研究科 遍プロジェクト		
	役職・氏名	助教 堀井 洋		
	所在地	石川県能美市旭台 1-1		
(9)事務担当者	氏名	倉本 信江		
	部署名・役職	学術協力課連携推進室研究振興係		
	所在地	石川県能美市旭台 1-1		
	電話番号	0761-51-1910		
	FAX 番号	0761-51-1919		
	E-mail	sinkou@jaist.ac.jp		

2. 体験・交流メニュー、セールスポイントは次のようである：

①歴史学研究者による「幕末金沢の庶民の暮らし」講座。「梅田日記」の概要とその時代背景について、北陸先端科学技術大学院大学堀井美里研究員の30分の解説。



図 3-17 歴史学研究者による「幕末金沢の庶民の暮らし」講座

②再現料理の飲食体験。日記に記載されている料理 7 品を現代の人の口に合うように再現。フードコーディネータと料理長の解説あり。



図 3-18 再現料理と飲食体験の様子

③地元ボランティアガイドと巡る日記の舞台ツアー。「梅田日記」に詳しいボランティアガイドによる、金沢市東山界隈の 2 時間半のツアー。途中の移動は、貸切バス使用。



図 3-19 ボランティアガイドツアーの様子

④茶屋でのお座敷体験。金沢市ひがし茶屋街の茶屋で、夕食を食べながらの約2時間半のお座敷体験。



図 3-20 お座敷体験

⑤謡体験。金沢市立中村記念美術館の茶室にて、宝生流能楽師による謡のデモンストレーションと体験。



図 3-21 謡体験

⑥江戸時代の製法の酒試飲と酒蔵見学。白山市鶴来町の小堀酒造店にて、きもと造りの話と試飲。



図 3-22 酒試飲と酒蔵見学

⑦募集ちらし





 AMANE

国土交通省「ニューターリズム創出・流通創出事業」

幕末金沢の庶民の暮らし

～藤田甚三久日記が描く旅～

モニターツアー

旅行日／2008年9月27日(土)～9月28日(日)

旅行代金／おとなお1人様 (1名1室利用) **38,800円**

募集人員／15名(最少旅行人員 10名)

●定員になり次第、申込締切ります

藤田日記とは

江戸時代末期の元金沢市 (1864) から奥越え市 (1867) の間、金沢町人藤田甚三久(藤田甚三久)が記した日記です。就農中成金階層に関する記事の後、お買占め、牛手打等、食料、行旅、衣食住に関することなどが記載され、幕末の金沢の庶民の暮らしを知る貴重な史料です。

旅のポイント 1. 「藤田日記」を基にして、幕末の庶民の暮らしを知り体験する多媒体的プログラムです。 2. 藤田日記に記した飲食店にも現地のガイドで飲み物も提供し楽しく学習できる企画があります。 随時キャンセル可 <http://amane-project.jp> をご覧ください。 モニターツアーの募集要項 - アフターと称するにこだわりのないです。 - ツアーの終了を満了と考えていただきます。

[illegible]

図 3-23 募集ちらし

⑧再現料理解説リーフレット（ツアー時、配布）



図 3-24 再現料理解説リーフレット

⑨ガイドマップ (Web 上での配信)



図 3-25 ガイドマップ

⑩ 石川県観光協会のHPの案内



図 3-26 石川県観光協会の HP の案内

⑪ 新聞記事のコピー



図 3-27 新聞記事のコピー

3. モニターツアー実施体制（関係者間の役割分担等）は以下のようである：

- 国立大学法人北陸先端科学技術大学院大学 知識科学研究科 遍プロジェクト：事務局機能（企画・運営全般）、構築した専用 Web サイトによる情報発信、アンケートの集計、報告書のとりまとめ、ガイドマップの作成
- 株式会社石川県旅行業協会： ツアーの企画、募集
- 石川県： ツアーの募集、アドバイザー
- 石川県観光連盟： HP による情報発信、ツアーの募集、アドバイザー

4. ツアーが期待された効果

幕末金沢の町人が書いた「梅田日記」を基にして、往時の庶民の暮らしを知り、体験するプログラムを準備した。また、日記に関して旅行前に専用 Web サイトで誰でも簡単に楽しく学習できる仕組みにより、金沢に興味があるが、歴史観光が難しい・面白くない・古くさいと思っている層に地域歴史観光に触れ、その魅力を発見する機会を与える。若い世代に参加してもらえよう募集チラシのほか、専用 Web サイトを構築し募集を行った。

5. 事業の結果

（1）催行日

2008年9月27日－9月28日（日）

（2）催行日程（目的地、出発地、宿泊地、帰着地、日数、時間）

目的地：石川県金沢市東山地区・白山市鶴来町 出発地：金沢市

宿泊地：金沢市内 帰着地：金沢市

日数：1泊2日 時間：11:00 集合ー翌日 14:45 解散

（3）募集人員と参加人員

募集人員：15名

参加人員：11名

図 3-28 モニターツアーの様子

遍プロジェクトの平成 20 年度『ニューツーリズム創出・流通促進事業』実証事業実施報告書によると、実施主体による事業評価については「アンケートの結果を踏まえ、参加者の満足度は非常に高く、全員がこれまでのツアーにはない『新しさ』もしくは『違い』を感じ、今回の内容はその期待どおりまたは期待以上であったと回答したことから、旅行客数の増加につながる可能性があると思われる」と記述している。しかし、2007 年 11 月 17 日の梅田日記観光ツアー「梅田日記に見る幕末金沢の街・人・時間を訪ねる旅」と同様に、若い世代の歴史観光誘致の課題は、料金が高いため、未解決である。この問題について、同報告書では、今後の本格実施を向けて、料金の大部分を占めるお座敷体験のオプション化を検討する方針を示した（モニターツアーアンケート集計結果と事業評価は附属資料②を参照）。

3-3-10. 「幕末金沢町人の暮らし—翻刻 梅田日記—」

の出版

遍プロジェクトは今年 4 月に「梅田日記」が本として出版することを図っている。本には遍プロジェクトが始まったきっかけ、歴史、IT、観光など多分野の専門家の参加による歴史資料の新しい活用法への挑戦、デジタルコンテンツ、観光旅行、再現料理など、プロジェクトメンバーが生み出した種々のアイディ

アが盛り込まれている。本は能登印刷出版部より発行し、予定価は 3,150 円である。本の出版と同時に、4 月 18 日に第 3 回「遍フォーラム」の開催も企画している。

第4章 結論

4-1. はじめに

この章では、「遍プロジェクト」の事例分析から明らかになったことをまとめる。そして、この成果を踏まえ、異分野コラボレーションによる地域活性化の在り方と今後の課題について論じる。

4-2. 事例分析と主要な発見

以下、事例分析に基づいて、本研究のリサーチ・クエスチョンに対する答えを提示する。

(1) 「遍プロジェクト」の異分野専門家達は、どのように共同作業

を行ったのか

「遍プロジェクト」は情報分野の研究者である北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科の堀井 洋助教と歴史学研究者である金沢大学大学院の横井美里氏により、歴史資料の有効活用・ITの有効活用・社会への貢献などの思いから発足した。さらに、戦争による破壊が少なかった石川県の歴史的町並み、資料の保存が相対的に良い状態であることから、歴史資料の観光分野への活用という発想から、金沢星稜大学観光分野の専門家である沢田 史子氏をメンバーに加わった。以上の三人を中心として、遍プロジェクトは一連の活動を提案、実施してきた。

図4-1は遍プロジェクトメンバー構成の拡大を示す。遍プロジェクトの組織は当初の情報（ベンチャー企業を含む）・歴史・観光三分野の少人数構成から、総務省「戦略的情報通信研究開発推進制度（SCOPE）」に採択されることによって、情報・歴史・観光分野以外に、観光ボランティアガイド、フードコーディネーター、料理人などによる多分野の専門家のコラボレーション活動に発展した。

図 4-1 遍のメンバー構成変化

図 4-2 は遍プロジェクト交流と創造の場づくりを示す。「 」は外部にオープンするネットワークを意味する。「遍プロジェクト」は、情報、歴史、観光分野の専門家、ベンチャー企業を中心に、外部の情報と環境を無視せず、お互いに平等的な交流と創造の場作りを通して、活動を行っている。「交流と創造の場」について、具体的にいうと図 4-3 で表しているように、内部では会議、E-mail、電話などの手段を通じて、メンバー間のコミュニケーションや意見交換を行う。また、ぶろぐ、フォーラム、イベント、新聞などにより、外部に対する情報発信、情報収集を行う。

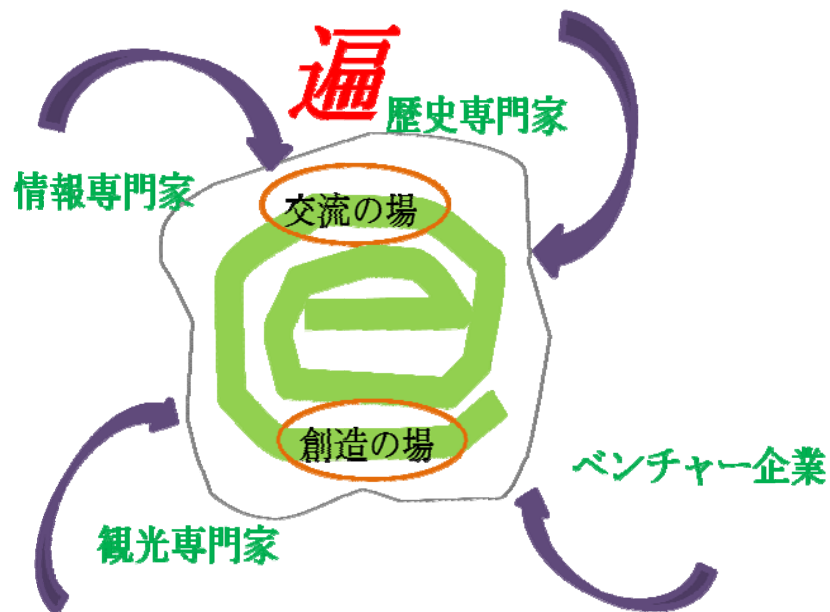


図 4-2 遍における交流と創造の場づくり
久保田、藤井（1995）p.121 図 5-2 を参考

様々な情報メディア

内部：	外部：
•会議	•ぶろぐ
•E-mail	•フォーラム
•電話	•イベント
	•新聞

図 4-3 様々な情報メディア

プロジェクトメンバー内部の交流の場として、2008 年 4 月 7 日遍プロジェクトの「ユニバーサルな知識表現による地域歴史観光 ICT の開発」が総務省「戦略的情報通信研究開発推進制度（SCOPE）」に採択された以来、同年 7 月 1 日から遍プロジェクトによる「SCOPE 委員会」が設置され、月一回ペースで今年 1 月まで計 6 回開かれている。

委員会の構成員は以下のものである：

委員長 堀井洋（北陸先端科学技術大学院大学）

外部委員 中野節子（金沢大学）

長山直治（元金沢市史専門員）

竹松幸香（金沢市前田土佐守家資料館学芸員）

つぐまたかこ（フードコーディネーター）

宮下和幸（金沢大学）

堀井美里（金沢大学）

内部委員 吉田武稔（北陸先端科学技術大学院大学）

沢田史子（金沢星稷大学）

大藪多可志（金沢星稷大学）

米田稔（株式会社 COM-ONE）

SCOPE 委員会では、観光分野での活用が期待される歴史資料が地域に「どのくらい」「どのように」存在するのかを調査・分析し、全容を詳細かつ学術的に明らかにすることを目的としている。委員会は遍プロジェクトの活動の展開に関わる意見の交流とアイディアの生成に取って重要な一環であり、メンバー達がリアルな場で直接顔を合わせることは知識の共有化と表出化に対応する創出場と対話場としてとても重要である。委員会の議事録は附属資料③を参照。

（２）異分野コラボレーションはどのように新しい価値観を生み出したのか

出したのか

図 4 - 4 は異分野コラボレーションの視点で見る遍プロジェクトの活動プロセスを示す。情報と歴史分野の専門家は相互交流を通して、お互いに刺激を与え、情報分野専門家は歴史に IT を応用することを提案し、歴史分野専門家は IT を利用して歴史を発信する考えを生み出した。さらに、両分野知識の統合と補完により、IT 技術を利用して歴史を発信する「梅田日記ぶろぐ」（歴史＋情報＝「梅田日記」ぶろぐ）が誕生した。その後、歴史資料を観光分野へ活用するという出発点から、情報と歴史分野の上で、さらに観光・料理専門家、及び地域ボランティアがメンバーに加わり、異分野コラボレーションの手法を通して、今までのない観光スタイル「遍旅」と「遍夜」の創造に達した（歴史＋観光＋フード＝遍夜）。

「遍旅」、「遍夜」の実施効果やアンケート調査から、参加者達はこれらの活動を通して、往時の人々の暮らしを体験・学習し、歴史の魅力を感じることができたとわかった。従って、この一連の活動は人々に歴史学的世界観の形成を

促すには有意義であると考える。

図 4-4 異分野コラボレーションの視点で見る遍の活動プロセス

出典：久保田、藤井（1995）p.99 図 4-1 を参考

このように、異分野専門家達は「梅田日記」の活用という課題に対して、コミュニケーションの場を通して、異なる視点を交錯させ、立体的に問題の本質を浮かび上がらせることにより、アイディアを相乗的に生み出して行く。この過程は、異分野コラボレーションの方法論と言え、いわば集団やグループの発想法である（図 4-5 を参照）。

図 4-5 異分野コラボレーションの手法による歴史資料の活用モデル

出典：久保田、藤井（1995）p.103 図 4-3 を参考

モデルの説明については下記のとおりである。

- (1) 異なる分野の人々が「地域活性化のための歴史資料の活用」という同じ問題の解決に対する執着心が重要。
- (2) 異なる視点の交差は常に各自の視点の揺らぎを起し、新しいアイデアを相乗的に生み出す。直接対面する交流は知識の共同化と表出化を促す。
- (3) 異分野視点の交差によって、人々は各自の分野から踏み出し、他分野の知識を吸収することで、分野のギャップを乗り越える。それにより全面的かつ本質的に問題を把握する能力を高め、自分の目で問題を発見し、オリジナリティを創出する。

(3) 異分野コラボレーションは地域活性化においてどのような役

割を果たしたのか

地域活性化に対して、貢献的であると言われている方法論の一つ、前章で紹介した細内（1999）のコミュニティ・ビジネスの方法論が挙げられる。ここでは、異分野コラボレーションの効果を、従来型のコミュニティ・ビジネス効果モデル図と比較して述べる。図4-6は「遍プロジェクト」が果せた地域活性化効果を示す。

人間性の回復について、「遍プロジェクト」のメンバーに加わった金沢史専門家長山氏、観光ボランティアガイド武野氏などは地域の住民でありながら、社会への復帰を期待している定年退職者でもある。遍の活動はこのような定年退職者に退職後でも社会に貢献できる舞台を提供した。その他、遍の活動は研究成果を地域振興・社会貢献に活かしたい研究者達に対しても、研究と実証を繋げる機会を提供した。さらに、地域住民と大学研究機関研究者の共同作業は、遍プロジェクトが外部ネットワークと交流する重要な一環であり、地域住民と研究者が一丸となり、コミュニティ意識の高まりにも有効的である。

文化の継承・創造について、歴史資料「梅田日記」を基に、歴史資料のデジタルコンテンツ化、ぶろぐの発信による歴史学の理解支援システムの提供、新しいスタイルの観光の実施など一連の活動は、「梅田日記」の知名度の向上、観光客の増加、町の整備に繋がる。そして「梅田日記」の独自性とその活用は、地域に独自の文化を生み出すに繋がる。

図 4-6 「遍」が今まで果せた地域活性化効果

出典：細内（1999） p. 56 図表 4 を参考

経済的基盤の確立の面では、遍プロジェクトの活動を通して、IT 技術と歴史資源が活用され循環することができた。経済的效果について、遍プロジェクトの学術性により、明確な効果はまだ見られていない。しかし、第 1 回遍ツアー、遍夜、モニターツアーを基に、これから地域の資源を活用する新しいスタイルの観光の本格実施による経済効果が期待される。また、遍プロジェクトの「ユニバーサルな知識表現による地域歴史観光 ICT の開発」が総務省「戦略的情報通信研究開発推進制度（SCOPE）」に選ばれること、および国土交通省平成 20 年度「ニューツーリズム創出・流通促進事業」が「梅田日記」をもとにしたモニターツアーを採択することにより、地域に一定的な投資と雇用機会を与えた。

社会問題の解決について、この点には遍プロジェクトの活動の効果とコミュニティ・ビジネスの効果の最も違うところが見られる。コミュニティ・ビジネスはニーズにあう社会サービスを提供するが、遍プロジェクトは単にニーズに合わせたサービスを提供ではなく、活動の初期段階から異分野間の交流、外部とオープンにやりとりを行うことで、複眼的に問題の把握と解決を図った。それによって、地域活性化は、地域に既存する活用価値のある資源を洗い出し、利用することが必要だと問題を把握した。その後、一連の活動を通して、「梅田日記」の知名度を向上させ、それによる付加価値への期待は、新しいニーズの創出に繋がる。また、研究者の研究成果の活用は、ある程度日本社会における

「ポストク」問題に、解決例の提供として有意義である。

異分野コラボレーションは地域活性化に対していかに有効であるか

遍プロジェクトは停滞している地域コミュニティから、眠っている資源の再評価を行い、地域の差別化を代表できる「梅田日記」を発見した。また、地域コミュニティに存在する様々な問題から、「地域活性化」を洗い出し、問題の解決に向けて取り組みを行いはじめた。さらに、地域住民から、遍プロジェクトの活動に合う人材を選び出し、メンバーに加わった。それらのメンバーは、異分野コラボレーションを通して、「梅田日記」のブランド化を図り、梅田日記ぶろぐ・再現料理試食会・観光ツアーなどの活動を提案・実施した。遍プロジェクトは国土交通省、総務省、石川県産業創出支援機構、大学研究機関から支援と協力を受けている。遍プロジェクトの活動は石川・金沢地域に歴史資料「梅田日記」の知名度を利用するビジネスへの展開という新しいニーズを創出した。これからは、遍プロジェクトの活動の拡大、或いはビジネスへと進展することにより、地域コミュニティの多様な人・物・金・情報を巻き込んで循環させ、地域コミュニティを停滞している状態から活性化へと促進させる。また、活性化したコミュニティは最終的に人間らしい暮らしの実現に繋がる（図 4-7 を参照）。

図 4-7 地域活性化のための歴史資料活用フローモデル

モデルの説明については下記の通りである。

- (1) 地域の十分活用されていない資源から、他地域との差別化を表せる資源、人的資源を洗い出し、金・物と組み合わせ・循環させることによって付加価値を創出できる。さらにその付加価値を通して活性化したコミュニティの実現が期待できる。
- (2) 地域活性化のための歴史資料活用は、異分野コラボレーションの組織で取り組んで、新しいアイデアを生み出す。
- (3) 歴史資料の地域ブランド化を通して、知名度を上昇することは新しい社会ニーズの創出による付加価値の創造と繋がる。

4-3. 今後の課題

1. 前節で異分野コラボレーションのアプローチを通して、「遍プロジェクト」の活動は新しい価値観を創出したと結論付けた。しかし、それに対する評価はまだ十分とは言えない。筆者は関係者に対するインタビュー、アンケート調査結果、実体験を通じて、プロジェクト内部における新価値観創出の評価を行った。今後は、プロジェクト外部の人々、地域と県外の住民、地域活性化に関わる各機関に対するアンケート・インタビューを行い、新価値観に対する客観的評価を行うことが必要。
2. 「遍プロジェクト」は今後も活動を続けていく方針である。また、法人化に向けて検討を行っている。今後は地域の歴史資料を活用する典型例として、遍プロジェクトの活動はどういう風に地域活性化に貢献するか、或いはどのように停滞している地域コミュニティを活性化したコミュニティに作り上げるのか、異分野コラボレーションのアプローチはその中でどんな風に役割を果たすのかについて、さらに観察し、研究する必要がある。
3. 異分野コラボレーションのアプローチは、問題意識を共有し、信頼関係を作ることが重要である。この点について、今後異分野コラボレーション手法を用いるとき、意識的に相手の立場や視点に立って、単なる批判ではない議論を行うことが重要である。
4. 「分野細分化」による総合的な視点で問題を解決する難しさに対して、自分の目で発見し、創造的に社会の問題解決を行うことが必要となってきた今の時代には、異分野コラボレーションを組織的展開し、知識を創造することが必要である。

参考文献

- [1] 遍プロジェクト (2008)「第1回遍フォーラム『幕末の金沢を知る 梅田甚三久とその時代』研究結果報告書」
- [2] 相原 憲一 (2002)「地域コミュニティ・ビジネスの活性化戦略」『NUCB journal of economics and information science』Vol.47, No.1(20020701) pp. 1-14
- [3] 青木克生(2004)組織と実践コミュニティ(communities of practice)―『アイデンティティとパワーに注目して』 組織学会 研究発表会
- [4] ビル・リー, マイク・バルクウィル (2005)『実践コミュニティワークエクササイズ集：地域が変わる社会が変わる』 学文社
- [5] エディエンヌ・ウェンガー、リチャード・マクダーモット、ウィリアム・M・スナイダー (2002)『コミュニティ・オブ・プラクティス』 翔泳社
- [6] 古澤和行 [ほか著] (2008)『コミュニティ・ラーニング：組織学習論の新展開』 ナカニシヤ
- [7] 堀井洋、林正治、沢田史子、堀井美里、吉田武稔 (2008)「デジタルコンテンツ化による歴史資料活用の提案～歴史資料『梅田日記』を事例として～」『観光と情報』、第4巻、第1号、pp. 27-33
- [8] 細内信孝 (1999)『コミュニティ・ビジネス』 中央大学出版社
- [9] 河村能夫 (1991)「農村活性化を考える基本的枠組」『農業と経済』；目瀬守男『メルヘンの里』に引用
- [10] 関智弘 (2007)「中小企業連携と母体組織―アドック神戸と兵庫県中小企業家同友会を事例として―」『阪南論集』第43巻第1号
- [11] 国土交通省観光白書平成17年版
- [12] 笠松研太(2006)「実践コミュニティの成功要因を探る研究」北陸先端科学技術大学院大学 知識科学研究科 修士論文
- [13] 久保田晃弘, 藤井浩美 (1995)『異分野コラボレーション―視点の交錯から創造へ』 ジャストシステム
- [14] 中原淳 (2008)『課題解決を目的とした自発的コミュニティ 実践共同体―Community of Practice』
- [15] 野中郁次郎・竹内弘高 (梅本勝博訳) (1996)『知識創造企業』 東洋経済新報社
- [16] 野中郁次郎 (1999)「組織的知識創造の新展開」『ダイヤモンド・ハーバード・ビジネス』9 AUGUST-SEPTEMBER, pp. 38-48.
- [17] 野中郁次郎・梅本勝博 (2001)「知識管理から知識経営へ」『人工知能学会誌』16巻1号、pp. 4-14

- [18] 野中郁次郎、紺野登 (1999)『知識経営のすすめ：ナレッジマネジメントとその時代』筑摩書房
- [19] 大河直躬編 (1995)『都市の歴史とまちづくり』学生出版社
- [20] 財団法人大阪市都市型産業振興センター (2006)「異分野連携による新産業創造動態調査報告書」
http://www.city.osaka.jp/keizaikyoku/hokoku/pdf/06oct_19_kiso_ibunya.pdf
- [21] ロバート・H・バックマン (2005)『知識コミュニティにおける経営』日本ナレッジマネジメント学会翻訳委員会
- [22] K・ロバート、イン原著 (近藤公彦訳) (1996)『ケース・スタディの方法』千倉書房
- [23] 崔瑛 (2007)「地方自治体による地域ブランド関連施策の現状と課題」筑波大学 修士論文
- [24] 坂本和一 (1994)『新しい企業組織モデルを求めて』晃洋書房
- [25] 立瀬剛志、小林俊哉、末長聡、柳川章博 (2005)「異分野連携研究における産学連携の課題と新たな方向性：人的交流から知識の交流に向けて」『年次学術大会講演要旨集Ⅱ』Vol. 20. pp. 968-971
- [26] 鳥居信彦 (2000)「歴史的遺産を利用した地域活性化の試みー飛騨高山・近江長浜・若狭小浜のケース・スタディー」北陸先端科学技術大学院大学 知識科学研究科 修士論文
- [27] 遠山亮子・野中郁次郎 (2000)「『よい場』と革新的リーダーシップ」『一橋ビジネスレビュー』Vol. 48, No. 1-2 (2000 pp. 4-17)
- [28] 「異分野連携新事業分野開拓に関する命令 (平成 17 年 5 月 2 日内閣府・総務省・財務省・厚生労働省・農林水産省・経済産業省・国土交通省令第 3 号)」<http://www.lawdata.org/law/htmldata/H17/H17F10007116003.html>
- [29] 米浪信男 (2000)『観光と地域経済』ミネルヴァ書房
- [30] 吉田孟史 (2008)『コミュニティ・ラーニング 組織学習論の新展開』ナカニシヤ

本論文に関係する学会発表

「遍プロジェクトによる地域観光の革新ー歴史資料『梅田日記』を事例としてー」 2008 年 5 月 28 日 北海道観光情報学会 ポスター発表

インタビュー記録

堀井洋氏	本学知識科学研究科助教、「遍プロジェクト」リーダー	2008年8月21日
横井美里氏	元金沢大学資料館学芸員、金沢大学大学院社会環境科学研究科博士後期	2008年8月21日
沢田史子氏	本学知識科学研究科研究員	2008年8月21日
林正治氏	本学知識科学研究科 博士後期	2008年8月19日
武野一雄氏	金沢観光ボランティアガイド	2008年8月12日

* 現地調査時に参加

- ✚ 2007年10月6日 リージョナル・ツーリズム・フォーラム
- ✚ 2007年11月4日 第一回遍フォーラム
- ✚ 2007年11月17日 梅田日記観光ツアー「梅田日記に見る幕末金沢の街・人・時間を訪ねる旅」
- ✚ 2008年5月21日 「梅田日記」再現料理試食会
- ✚ 2008年6月14日 第2回遍フォーラム「梅田日記を探る・活かす・楽しむ ～歴史資料の活用とこれから～」
- ✚ 2008年8月28日 第2回 SCOPE 委員会
- ✚ 2008年9月26日 第3回 SCOPE 委員会
- ✚ 2008年11月11日 第4回 F I T ネット商談会への出展
- ✚ 2008年11月28日 第5回 SCOPE 委員会
- ✚ 2008年12月25日 第6回 SCOPE 委員会

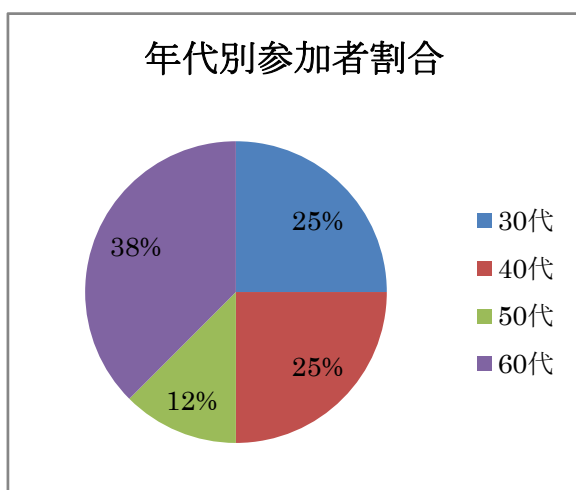
附属資料①第 1 回遍フォーラムアンケート集計結果
(金沢星稜大学 沢田史子氏)

附属資料②モニターツアーのアンケート集計結果 と事業評価

【参加者の属性について】

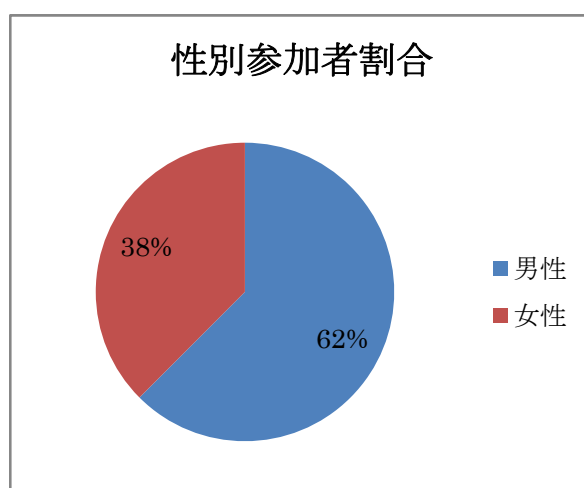
i) 年齢

: 60代の割合が高かった。



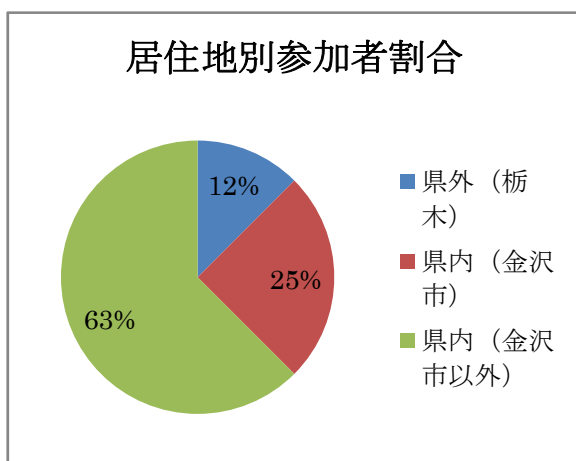
ii) 性別

: 男性の割合が比較的高かった。



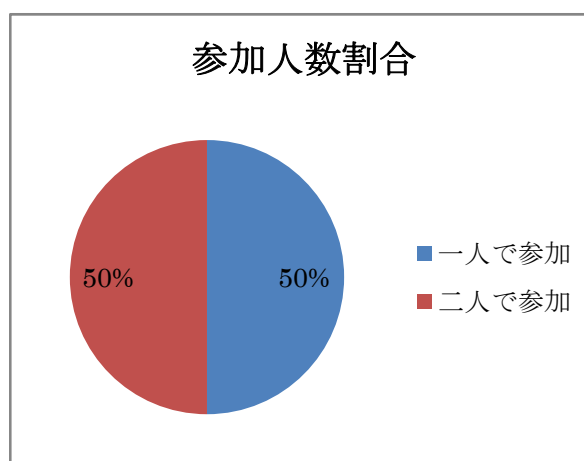
iii) 居住地

: 県内が多く、金沢市以外の割合が高かった。



iv) 参加人数

: 「一人で参加」「二人で参加」のみで、同程度の割合であった。



v) モニターツアーを知ったきっかけ

: 「株式会社石川県旅行業協会の案内により知った」が最も多かった。「遍プロジェクトのHPで知った」という回答もあった。

【ツアーの内容について】

1) モニターツアーに申し込んだ理由

- ☐ 「テーマ性」、「体験プログラム」、「内容の斬新さ」が多かった。

2) モニターツアー全体としての感想

- ☐ 北陸先端大・遍プロジェクトの企画支援で行われたツアーで、旅行会社だけでは作成できない内容である。
- ☐ 「梅田日記」という基になるテーマがあり、それに沿ってきちんとまとまっていて、大変素晴らしい。
- ☐ 普段できない体験ができて、楽しかった。
- ☐ 体験が多く、大変良かった。
- ☐ 見所が盛り沢山で、食事も充実していて良かった。

3) ツアー料金に対する感想

- ☐ 通常のツアー（有名な観光地巡り、温泉地泊）と比べると、旅行代金（38,800 円）がかなり高め。しかし、参加してその内容を体験してみると、決して高くはないように感じた。
- ☐ 内容から見て適切だと思う。
- ☐ 高い。
- ☐ お座敷体験が高価なので、適価だと思う。

4) 宿泊施設に対する感想

- ☐ J R 金沢駅直結で、駅ビル内にあり、立地・利便性抜群であった。
- ☐ 新しくシンプルで良いが、浴室がもう少し広いと良い。
- ☐ ベッドが広く良かった。
- ☐ 新しく、サービスも良かった。

5) 歴史研究者による「幕末金沢の庶民の暮らし」講座に対する感想

- ☐ 大変興味深く、わかりやすかった。
- ☐ とても上手くまとめてあり、理解できた。満足した。
- ☐ 席について、じっくり聞けたのが良かった。
- ☐ ツアーの初めに、「梅田日記」に関する知識がついたばかりでなく、これから始まるツアーへの期待がさらに高まった。

6) 幕末期の庶民の食事体験（再現料理）の感想

- ☐ 幕末にしては手の込んだものを食べていたと驚いた。

- ☐ 「蓮根のおろし蒸したてに白砂糖をかける」は特に美味だった。
- ☐ 想像以上に美味しく、現在とのギャップを感じなかった。自宅での参考にしたい物もあり良かった。
- ☐ 美味しかった。調理方法や素材に関する解説があれば、さらに良い。

7) 地元ボランティアガイドと巡る梅田日記の舞台ツアーに対する感想

- ☐ 当時の様子がひしひしと伝わってくる素晴らしいガイドのおかげで、大変充実した内容であった。
- ☐ 素通りするような場所にも、物語が有って感激した。
- ☐ 梅田甚三久に親近感を覚えた。

8) 茶屋でのお座敷体験に対する感想

- ☐ 堅苦しさを感ぜない、楽しい時間だった。
- ☐ 滅多に体験できないことが、体験できて興味深かった。但し、若くてお酒が飲めず、お座敷の文化に興味がない人は楽しめないと思う。
- ☐ 初めての体験だったが、意外と敷居が高くない感じで、華やかさも楽しかった。
- ☐ 芸妓さんの態度にホスピタリティが感じられず、閉鎖的な感じがした。

9) 酒蔵見学と江戸時代の製法の酒試飲に対する感想

- ☐ 酒蔵見学は、他の酒蔵と同じだが、お酒の味はワインのようなフルーティーさがあり、美味しかった。
- ☐ 江戸時代の製法に挑戦される話が興味深かった。
- ☐ 酒蔵をもう少し見学したかった。

10) 謡体験に対する感想

- ☐ 節回しが大変難しくついていけなかったが、良い体験ができた。
- ☐ 難しいが、楽しかった。
- ☐ 先生の教え方が上手かった。
- ☐ 声を出すのは気分転換になって良かった。先生の説明がわかりやすかった。
- ☐ 1時間という短い時間であったが、能楽に触れることができ、身近に感じた。
- ☐ 時間が足りなかった。
- ☐ 場所（お茶室）が良かった。

11) 旅行日程に対する感想

- ☐ 遠方からの参加だったが、集合・解散の時間が良かった。

- ☐ ゆったりとした体験時間があって良かった。
- ☐ ちょうど良い。

12) 交通手段に対する感想

- ☐ 10名以下であれば、バスでなくタクシーでも良いと思う。
- ☐ 貸切バスでの移動で、楽だった。
- ☐ バスが大きく、贅沢であった。

13) ツアーの内容に期待していたこと

- ☐ 再現料理
- ☐ お座敷体験
- ☐ 新しい発見や、知的な楽しみ

14) 今回の内容はその期待どおりだったか

- ☐ 期待どおり、期待以上の理由
- ☐ 再現料理のフードコーディネーターと料理長の解説があり、より味わって試食できたから。
- ☐ 学術的な面白さが感じられたから。
- ☐ 普段体験できないことが体験できたから。
- ☐ 体験プログラムが全て充実していたから。

15) これまでのツアーにはない「新しさ」もしくは「違い」を感じたか

- ☐ 感じた点とその理由
- ☐ 梅田甚三久が暮らした当時の姿を色濃く残す金沢東山界限を、彼が記した日記と共に巡る旅のひとつを、とても新鮮に感じる事ができた。
- ☐ ゆっくり金沢の寺院群を歩けたこと。
- ☐ 現在のものの体験でなく、昔（過去）のものの体験であること。
- ☐ 「観る」だけでなく、「体験」したこと。
- ☐ 「梅田日記」という古文書を基に全てのプログラムが構成されている点。

16) 今後「こんな内容のツアーがあれば参加してみたい」と思うもの

- ☐ バイクでまわる歴史ツアー

(5) 実施主体による事業評価

【全体評価】

アンケートの結果を踏まえると、ツアー料金に関して参加前は高いと感じていたが、参

加し各種の体験をしたことで、その値段に納得した参加者が多かった。募集段階から、従来のツアーにはない価値を伝え、代金を理解させる工夫が必要である。参加者の満足度は非常に高く、全員がこれまでのツアーにはない「新しさ」もしくは「違い」を感じ、今回の内容はその期待どおりまたは期待以上であったと回答したことから、旅行客数の増加につながる可能性があると思われる。ただし、料金の大部分を占めるお座敷体験で、がっかりしたという意見もあった。また、若い世代の参加を期待していたが、料金が高くて参加できないという人が多かった。お座敷体験のオプション化について、今後の本格実施に向け検討しなければならない。

【個別の事業ごとの評価】

①歴史研究者による講座

：ツアーの初めに、本ツアーの題材となっている「梅田日記」の解説を行った。観光客向けにわかりやすい表現で説明が行われ、大変好評であった。椅子に座って、落ち着いて聞くことができ、より理解が深まったと考えられる。

②再現料理の試食

：観光客が旅行する日と近い記載日の料理を再現することにより、地域の旬の食材を使った料理を提供することができる。そのため、本ツアーのために、新しいメニューの開発を依頼した。しかし、本格実施にあたっては、季節ごとにメニューを更新することは、コスト的に厳しいと考えられ、年間を通じて提供できるメニューの開発も検討する必要がある。また、料理の簡単な解説を書いたリーフレットを作成し、フードコーディネーターが説明した。概ね好評であったが、参加者から調理方法や素材に関するさらに詳しい解説があれば良いとの意見があった。これらの内容を盛り込んだリーフレットの充実を図る必要がある。

③地元ボランティアガイド

：今回、案内してくれたガイドは、「梅田日記」に関する知識が非常に豊富で、参加者は大変満足していた。ガイドの知識・スキルが参加者の満足度に大きな影響を与えた。本格実施にあたっては、さらに複数のガイドの養成が必要である。

④お座敷体験

：全体評価でも述べたとおり、参加者の満足度は高かったが、価格が高いため希望者のみの参加（オプション）とすることを検討する必要がある。

⑤謡体験

：一流の講師（能楽師）による本格的な指導が好評であった。能楽師は、土日に舞台・発表会が多く、スケジュールの早めの調整が必要である。

⑥専用Webサイト構築

：旅行前に、専用Webサイトで、「梅田日記」の解説と見どころ・体験メニューの詳細を発信した。本サイトを見た参加者から、ガイドの説明が理解しやすかったという意見

があった。また、全員が本サイトが日記および旅程に関する知識獲得に役立ったと回答していることから、専用Webサイトは募集のみならず、事前の学習のための場として有効であることが明らかとなった。

(6) 今後の展開 (予定)

来年度は、本モニターツアーとほぼ同じ内容でツアーを実施する予定である。ただし、お座敷体験はオプションにできないか検討する予定である。

(7) その他

特になし。

附属資料③第2回 SCOPE 委員会議事録

会 議 議 事 録			
第2回 北陸地域における歴史資料の先端的活用に関する調査委員会			2008年9月5日
日 時	2008年8月28日 13:00～17:00	場 所	前田土佐守家資料館
出席者	中野節子（金沢大学）吉田武稔（北陸先端科学技術大学院大学）長山直治（元金沢市史専門員）竹松幸香（金沢市前田土佐守家資料館学芸員）つぐまたかこ（フードコーディネーター）宮下和幸（金沢大学）堀井(横井)美里（金沢大学）沢田史子（金沢星稜大学）米田稔（株式会社 COM-ONE）山本昇平（株式会社 COM-ONE）堀井洋（北陸先端科学技術大学院大学）Da Ru（北陸先端科学技術大学院大学）		
No.	打 合 せ 事 項	担当	資料
1	情報システムによる歴史資料解析手法の開発(経過報告) →登場人物の関係性に着目し、人物名の出現頻度を情報システムによって解析。	堀井	1
	・頻度よりも、必要な人物名を史料から一括抽出できること自体に、歴史研究作業における情報システムの利便性がある。		
2	歴史研究用ソフトウェア開発の提案(経過報告) ①OCR作業 ②検索ソフトウェアの開発	山本	5
①	・OCR化の際読み込めない文字については、OCR化時の解像度を上げ、OCR化後に歴史研究者が原本とテキストデータを照合することによって、対応する。		
	・OCR化により、必要な言葉が史料から抽出できる必要がある。従って、原本の文字配置がOCR化後に反映されなくてもよい。		
	・必要な言葉を抽出する精度を上げるためには、辞書機能を充実させる必要がある。		
	・「観光」目的で、史料から必要な言葉を抽出する場合、あらかじめ現代の社会的ニーズを反映した観光用ストーリーなど、いくつかの異なる分野のストーリーを作成する必要がある。その上で、そのストーリーが史実に忠実かどうか歴史学的検証を経た後、史料から必要な言葉を抽出する。		
	(休憩)		
②	・開発中の検索機能を利用する事によって、歴史研究の作業量の減少を図ることができる。		
	・検討事項については、次回までに試作を提案する。		

3	歴史資料活用ルールを検討 →様々な分野のルールを提案		
	・クリエイティブ・コモンズの例	堀井	1
	・歴史学関連分野における諸ルール	横井	2,3
	・エコツーリズムの基本理念	沢田	6
	・日本生活情報誌協会 広告倫理綱領等	つぐま	7
	・ルールよりも、まず、明文化された基本的な理念が必要である。今回の各事例を参考に理念のたたき台を作成し、検討する。		
4	活用可能な歴史資料の検討		
	・分析対象史料として『金沢市史』近世篇4・5を取り上げ、その一部をOCR化する。同時に、「梅田日記」「鶴村日記」等の個別史料の分析も行う。		
5	その他 →次回日程・場所は9月26日(金)四高記念館		

謝辞

この研究を遂行するにあたり、終始暖かく見守って下さった指導教員の吉田武稔 教授に深謝いたします。また、常日頃から研究に対する助言や議論を頂き、研究活動以外の面に関しまして、沢山面倒見て下さった堀井洋 助教、金沢大学の堀井美里氏に感謝いたします。

研究を進めるにあたってはいつも適切な指導や資料の提供、励ましの言葉を頂きました金沢星稜大学の沢田史子氏、また研究室の林正治氏をはじめとした皆様に感謝の意を表します。

また、金沢市観光ボランティアガイドの武野雄一氏へのインタビューに際しましては、ご快諾いただき、協力頂いたことを心より感謝いたします。

最後に、無鉄砲な性格の筆者を陰ながら支えてくれた両親、弟の理解に本当に感謝いたします。